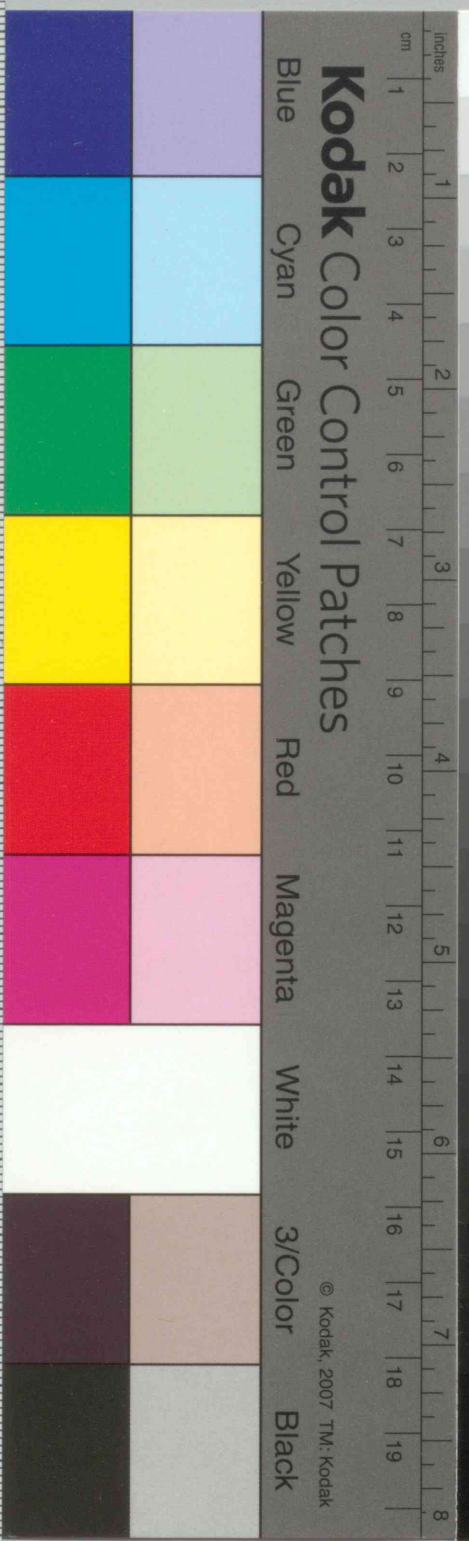


大正女子國文讀本
修正版
卷七

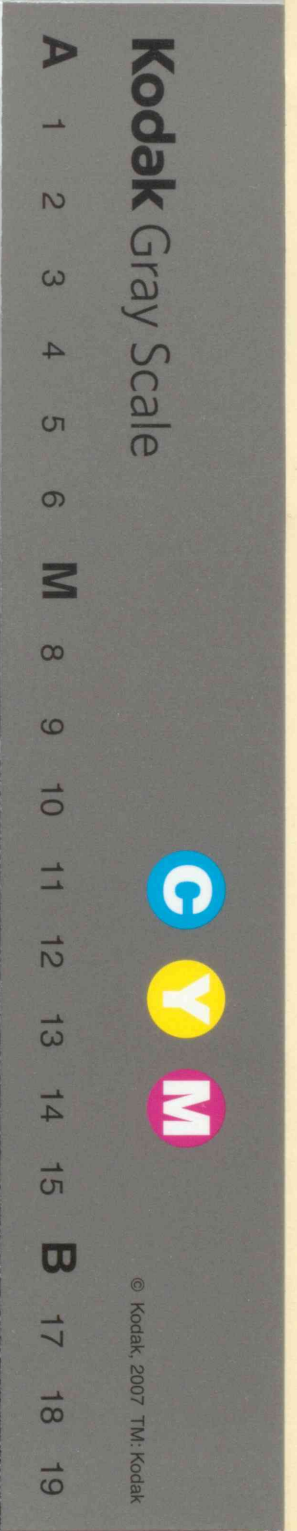
3759
No.19
資料室



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

42182

教科書文庫

4
810
42-1923
200030
2422



3759
H019

資料室

大正十二年二月一日

文部省檢定

高等女子學校國語教科用科

保科存一編

大正女子國文讀本

東京 會社育英書院 發行



大正女子國文讀本 修正版卷七

目次

一	花のさだめ	本居 宣長	一
二	蛙の聲	長 塚 節	五
三	櫻諍	(續 狂言記)	二
四	筆の歌	武 島 羽 衣	二六
五	阿新丸 その一	(大 平 記)	一八
六	阿新丸 その二		三五
七	四萬温泉より留守宅へ	(日用各家の手紙)	三
八	糟糠の妻 その一	宮 崎 三 味	三五

目次

九 糟糠の妻 その二 四〇

一〇 御嶽山頂の雲 吉江 孤雁 四〇

一一 太田道灌 大町 桂月 五

一二 平家のあはれ (平家物語) 五

一 故郷の花 五

二 小枝の笛 五

一三 泉 徳富 蘆花 七

一四 湖畔の感想 下田 將美 七

一五 仁和寺の法師 吉田 兼好 八

一 石清水 八

二 鼎かづき 八

一六 琉球の情趣 昇 曙 夢 八

一七 旅ごころ 島崎 藤村 九

一八 愛兒の記念 藤岡作太郎 九

一九 伴の世話になりし禮狀 一〇

二〇 和歌の感興 (駿臺雜話) 一〇

二一 顯家卿の北の方 (吉野拾遺) 一〇

二二 御袖の涙 香川 敬三 一〇

二三 一茶小品 (一茶選集) 一〇

一 雞の蹴合 一九

二 老懷 二〇

三 丸儲け 二一

二四 布施太子の出城 その一……………倉田百三…三三

二五 布施太子の出城 その二……………一元

二六 布施太子の出城 その三……………三五

憤、セサレハ啓セス

慄セサレバ世發セス

一陽ヲ以テ之レニ示レ、三陽ヲ以テ反セサレバ

又教ニルユトヲナサス



大正女子國文讀本 修正版卷七

擬古文 一 花のさだめ

花はさくら。さくらは、山櫻の葉あかくてりて細きがまばらにまじりて、花しげく咲きたるは、又たぐふべき物もなく、うき世のものとも思はれず。葉青くて花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大かた山櫻といふ中にも、しなとのありて、こまかに見れば、一本ごとにいさゝか變れるところありて、またまた同じきはなきやうなり。すべてくもれる日の空に見あげたるは、花の色あざやかならず。松などの青やかにしげ

りたるこなたに咲けるは、ことに色はえて見ゆ。空きよくは
れたる日、日影のさすかたより見たるは、にほひこよなくて、お
なじ花ともおぼえぬまでなむ。朝日はさらなり、夕ばえも。

とよみしむねやいもる人ささる

朝日あけほひささるる

本居宣長の筆蹟

ありて世の中云々
のこりなく散るぞめでたき
櫻花ありて世の中はてのう
ければ(古今)集談人知らず

梅は紅梅、ひらけさしたるほどぞいとめでたきを、さかりにな
るまゝに、やうくしらせゆきて、見どころなくなるこそいと
くちをしけれ。さくらの咲けるころまでも、散ることしらで
むげににほひなく、ねびれしほみて残りたるを見れば、げにあ
りて世の中は何事もみなかくこそと、見る春ごとに思ひ知ら

るか。白きはすべて香こそあれ、見るめはしなおくれたり。

大かた梅の花は、ちひさき枝を物にさして、ちかく見たるぞ、梢



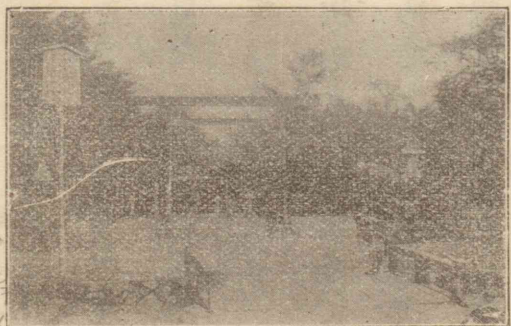
本居宣長

ながらよりはまされ
る。桃の花は、あまた
咲きつゝきたるを遠
く見たるはよし、ちか
くてはひなびたり。
山吹かきつばたなで

しこ萩すゝきをみなへしなど、とりどりにめでたし。菊もよ
きほどにつくろひたるこそよけれ、あまり麗はしく、したゝか
につくりなしたるは、なかくに品なくなつかしからず。つ

本居宣長
國學者。號は
鈴の屋。享和
元年歿、七十
二歳。

つじ、野山に多く咲きたるは目覺るこゝちす。海棠といふも
の、唐めきてこまやかに、麗はしき花なり。
そもくかくいふは、みなおのが思ふ心
にこそあれ。人は又おもふ心ことなる
べければ、ひとやうに定むべきわざには
あらず。又いまやうの世の人もてはや
すめる花どもも、世におほかるをかぞへ
いでぬは、ことさらめきたるやうなれど、
歌にもよみたらず、ふるき物にも見えたることなきは、心のな
しにや、なつかしからずおぼゆかし。されどそれはたひとや
うなるひがごゝろにやあらむ。
社 神 山 室 山



(本居宣長—玉かつま)

二 蛙の聲

春は空から、さうして土から微に動く。毎日のやうに西から
埃を捲いて來る疾風が、どうかするとはたと止つて、空際にふ
わふわとした綿のやうな白い雲が、ほつかりと暖い日光を浴
びようとして僅に立ちあがつたといふやうに、動きもしない
でちつとして居ることがある。水に近い濕つた土が暖い日
光を思ふぞんぶんに吸うて、其の勢づいた土の微な刺戟を根
に感ぜしめるので、田圃の榛の木の地味な蕾は目に立たぬ間
に少しづつ延びて、ひらくと動き易くなる。其の刺戟から
蛙はまだ蟄居の状態に在りながら、稀にはそつちでもこつち

でもくゝと鳴きだすことがある。空から射す日の光はそろ／＼と熱度を増して、土はそれを幾ら吸うても止めようとせぬ。土は凡てをだん／＼と刺戟して、堀の邊には蘆やとだしばや其の他の草が、空と相映じてすつきりと其の首を上げる。軟さに満された空気を更に鈍くするやうに、榛の木の花はひら／＼と止まず動きながら、煤のやうな花粉を撒散らして居る。蛙は假死の状態から離れて、軟かな草の上に手を突いては、驚いたやうな容子をして空を仰いで見る。さうして彼等は慌てたやうに聲を放つて、其の長い睡眠から復活したことを空に向つて告げる。それで遠く聞く時は、彼等の騒しい聲は只空にのみ響いて快げである。

彼等は更に春の到來を一切の生物に向つて告げ知らせる。草や木が心づいて其の活力を存分に發揮するのを見ない。ちは鳴くことを止めまいと力める。田圃の榛の木は疾うに花を捨て、自分が先に嫩葉の姿に成つて見せる。黄色味を含んだ嫩葉が、爽かて且朗かな朝日を浴びて、快い光を保ちながら、蒼い空の下に、まだたゆたうて居る周囲の林を見る。岬のやうな形に這うて居る水田を抱へて、周囲の林は、漸く其の本性のまに／＼、白つぼいのや、赤つぼいのや、黄色つぼいのや、いろ／＼に茂つて、それが氣が付いた時に急いで一つの深い緑になるのである。雑木林のそこらこゝらに散在して居る開墾地の麥も、すつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黒い瞳を

集めて羞かしさうに葉の間からこつそりと四方を覗く。雑木林の間には又芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。其の麥や芒の下に居を求めると其の同族の聲のみが空間を支配して居る可き筈だと思つて居る蛙は、其の囀る聲を壓し去らうとして、互の身體を飛びこえ飛びこえて鳴きたてるので、小勢な雲雀はすつとおりて麥や芒の根に潜んでしまふ。さうしては、蛙の鳴ぬ日中にのみ、之を仰げば眩ゆさに堪へぬやうに、其の身を遙に煌めく日の光の中に没して、其の小さな喉の裂けるまでは劇しく鳴かうとするのである。蛙は愈益、鳴き誇つて、檜の木のやうな常緑木の古葉をも一時にからりと

落さねば止むまいとする。

此の時凡ての樹木や、それから冬季の間にはぐつたりと地に附いて居たすべての雑草が、爪立して只空へ空へと暖かな光を求めて止まぬ。土がそれをぢつと曳きとめて放さない。それで一切の草木は土と直角の度を保つてゐる。冬季の間は土と平行することを好んで居た人も鐵の針が磁石に吸はれる如く土に直立しててんでに手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲しいと人が思ふ時、蛙は一齊に裂けるかと思ふ程喉の袋をふくらませて、身を撼がしながら殊更に鳴きたてる。白い經絲のやうな雨は、水が田に滿つるまで注いで又注ぐ。鳴くべき時に鳴く爲にの

み生れて來た蛙は、荇株を打返し〜働いて居る人々の、周圍から足下から逼つて、敏捷に其の手を動かさせ動かせと促して止まぬ。蛙がびつたりと聲を呑む時には、日中の暖さに人もぐつたりとなつて、田圃の短い草にごろりと横になる。更に蛙は、ひつそりと靜かな夜になると、如何に自分の聲が遠く且遙に響くかを誇るものゝ如く力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢる時蛙の聲はめつきり遠く隔つて、それがぐつたりと疲れた耳を擦つて、百姓の凡てを安らかな眠に誘ふのである。熟睡することによつて、百姓は皆短い時間に肉體の消耗を恢復する。彼等が雨戸の隙間から射す夜明の白い光に驚いて、蒲團を蹴つて外に出ると、今更のやうに耳に迫る蛙の聲に其の覺

長塚節
小説家。故人

アト
狂言で、シテ
の次の役者

醒を促されて、井戸端の冷たい水に全く朝の元氣を喚びかへすのである。草木は、遠く遙に響けと鳴く其の聲に撼られつゝ、夜の間成長する。櫟や檜や其の他の雜木は、蛙が鳴けば鳴くほど、さうしてそれが鳴きやむ季節までは幾らでも繁茂することを繼續しようとする。其處には毛蟲や其の他のあさましい損害が或は有るにしても、しとくと屢梢を打つ雨が空の蒼さを移したかと思ふやうに、力強い深い緑が地上を掩うて爽かな涼しい蔭を作るのである。 (長塚節一士)

三 櫻諍

アト「これはこのあたりの者でござる。この頃はいづ方も花

の盛りぢやと申す程に、花見に参りたう存ずれども、暇がなさに、参ることもえいたさぬ。得致最早暇になつてござる程に、今日は花見に参らうと存ずる。先づ太郎冠者を者を呼びだし、申しつけう。

「やい、太郎冠者あるか。」

シテ

能・狂言等で、主となつてその技を行ふ役者

太郎冠者「はあ。アト居たか。」シテ「お前に居ります。」

アト「汝を呼出すこと、別のことではない。この頃は方々の花盛りぢやといへども、暇がなさに、花見に行くこともならなんだ。最早暇になつたほどに、花見に出でうと思ふが、何とあらうぞ。」

シテ「これは珍しいことを仰せられます。このごろは櫻の盛

りぢやと申す程に、櫻を御覽ぜられるとあれば尤もでござるが、珍しからぬはなを御覽ぜられて、何にせらるゝ。」

アト「いや、おのれは何事をいふ、櫻も花も同じことぢや。」

シテ「これは頼うだ人とも覺えぬことを仰せらるゝ。左様に仰せられたらば、人中で恥をかゝせられる、身どもは苦しいござらぬが。」

アト「して、汝がその様にいふは仔細があるか。」

シテ「なか、仔細こそござれ。『はな』が見させられたくば、私が『はな』を見させられい。他所へござるまでもござらぬ。」

アト「いや、おのれは言語道斷のことをいひ居る。おのれが面なは『鼻』といふ。『花』といふは別ぢや。」

シテ「さうではござらぬ。歌などにも櫻とは詠まれたれども、『はな』とは詠まれませぬ。」
 アト「なかくナカクでもないことをいひ居る。その歌を詠うで聞かせい。」

シテ「詠うで聞かせたらば、肝を潰させられう。」
 アト「急いで詠め。」

櫻散る云々
拾遺集、紀貫之の歌

シテ「心得ました。『櫻散る木の下蔭は寒からで、空に知られぬ雪ぞ降りける。』これは何と。」

アト「此方にも『花』といふ歌がある。」

シテ「さらば詠うで聞かせられい。」

アト「行き暮れて木の下蔭を宿とせば、花や今宵のあるじなら

行き暮れて云々
平忠度の歌

まし。」

シテ「この方にもまだござる。『櫻さく遠山どりのしだり尾のながくし日もあかぬ色かな。』

アト「それなら此方にもある。『吉野山去年のしをりの道かへて、まだ見ぬ方の花を尋ねむ。』

シテ「それなれば、こちらには謠にござる。」

アト「謠へ、聽かう。」

ウシタヒ「櫻かざしの袖ふれて。」

アト「一段の謠謠ふ、致しヒナガ様がござる。やい、太郎冠者ウタヒ『花見車暮るゝより、月の花よ待たうよ、月の花よ待たうよ。』
 シテ「はあ、これでつまりました。」

櫻さく云々

新古今集 後鳥羽院御製

吉野山云々
同上僧西行の歌

櫻かざしの云々

今はさながら花も雪も、皆白雲の上人の櫻かざしの袖ふれて、花見車暮るゝより月の、花よ待たうよ(謠小唄)

アト「總別何も知り居らいでむざとしたことをいひ居つて某
 と競合^{キョウカ}ひ居る。彼方へうせい。」
 シテ「はあ。アト「えい。シテ「はあ。」
 (續狂言記に據る)

四 筆の歌

月花^{ツキハナ}めづるみやび男が
 向ふつくゑの紙のうへ
 走ればやがて歌成りて
 星照り日出で鳥うたふ
 天地^{アメノチ}ゑがく繪^ヱだくみが

倚^ヨるやみなみの窓の下
 動^ウけば臆^{オソ}て晝は成りて
 水落ち木生ひ草あをし

壯心^{ソウシン}鬱^{ウツ}勃^{ハツ}天を衝^ツく

英雄^{イロウ}の手に觸るゝ時
 落筆^{ラクペン}のもと龍蛇飛び
 雲煙くらく地をおほふ

慷慨^{カウカイ}淋漓^{リンリン}怒髮^{イカガミ}立つ

志士の腕に執られては

片言ハタチコト 隻句ヒトコト 鬼神泣き

哀音ながく世につたふ

功成り名遂げ業卒へて

身は棄てらるゝ竈カマドの中

煙と化して消ゆれども

うらまぬ筆の心清しや

(武島羽衣)

武島羽衣
國文學者。名
は又次郎

資朝

藤原氏

仁和寺

山城國葛野郡

花園村、眞言

宗御室派の總

本山。俗稱御

五 阿新丸 その一

日野中納言資朝の子息國光の中納言、その頃は阿新殿とて歳十三にておはしけるが、父の卿召人ケノボリになり給ひしより、仁和寺

邊も仕方はないに隠れて居られけるが、父誅せられ給ふべきよしを聞きて、
「今は何事にか命を惜しむべき。父と共に斬られて、冥途の旅の伴をもし、又最後の御有様をも見奉るべし。」とて母に御暇をぞ乞はれける。
母御頻りに諫めて、「佐渡とやらんは、人も通はぬ怖ろしき島とこそ聞ゆれ。日數を經る道なれば、いかんとしてか下るべき。その上汝にさへ離れては、一日片時も命存ふべしとも覺えず。」と、泣悲しみて止めければ、「よしや伴トナリなひ行く人なくば、如何なる淵瀬にも身を投げて死なん。」と申しける間、母痛く止めば、又目の前に憂き別もありぬべしと思ひ侘びて、力なく、今まで唯一人附添ツケひたる中間を相添へられて、遙々と佐渡國へぞ下さ

れける。路遠けれども、乗るべき馬もなければ、はきもならはぬ草鞋に、管の小笠を傾けて、露分けわぶる越路の旅、思ひやるこそ哀れなれ。

都を出でて十日あまりと申すに、越前の敦賀の津に着きにけり。これより商人船に乗りて、程なく佐渡國へぞ着きにける。人してかうといふべき便もなければ、自ら本間が館に至りて中門の前にぞ立ちたりける。折節僧のありけるが立出でて、「この内への御用にて御立ち候か。また如何なる用にて候ぞ。」と問ひければ、阿新殿「これは日野中納言の一子にて候が、近頃斬られさせ給ふべし。」と承りて、その最後の様をも見候はんため、都より遙々と尋ね下りて候。といひもあへず、涙をはらは

らと流しければ、この僧心ありける人なりければ、急ぎこのよしを本間に語るに、本間も岩木ならねば、さすが哀れにや思ひけん、聽てこの僧を以て持佛堂へいざなひ入れて、踏皮行纏脱がせ、足洗ひて、おろそかならぬ體にてぞ置きたりける。

阿新殿これをうれしと思ふにつけても、同じくは父の卿を疾く見奉らばや。といひけれども、今日明日斬らるべき人にこれを見せては、なかく黄泉路の障ともなりぬべし、また關東の聞えも如何あらんずらんとて、父子の對面を許さず。四五町隔たりたる處に置きたれば、父の卿はこれは聞きて、行方も知らぬ都に、如何あらんと思ひやるよりもなほ悲し。子はその方を見やりて、浪路遙かに隔たりし鄙の住居を思ひやりて、心

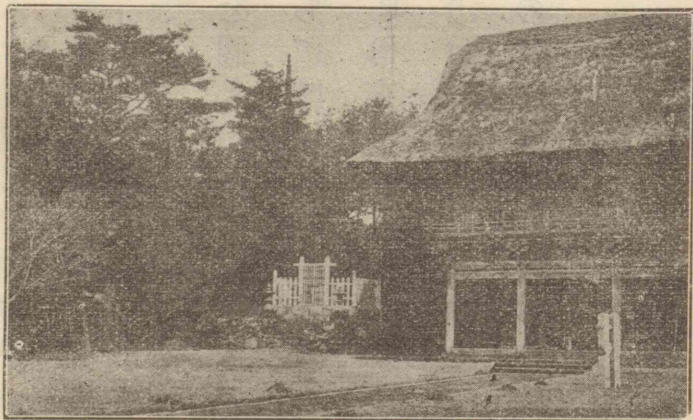
苦しく思ひつる涙は更に數ならずと、袂の乾く隙もなし。これこそ中納言のおはします牢の中よとて見やれば、竹の一叢茂りたる處に、堀、掘廻らし、塀塗りて、行通ふ人も稀なり。なさけなの本間が心や。父は禁籠せられ、子はいまだをさなし。縦令一所に置きたりとも、何程の怖れかあるべきに、對面をだに許さで、まだ同じ世の中ながら、生を隔てたる如くにて、なからん後の苔の下、思ひ寢に見ん夢ならんでは、相見んこともありがたしと、互に悲しむ恩愛の父子の道こそ哀れなれ。

五月二十五日の暮程に、資朝卿を牢より出だし奉りて、遙かに御湯も召され候はぬに、御行水候へ。と申せば、早斬らるべき時になり、けりと思ひ給ひて、嗚呼、うたてしきことかな。我が最

五月二十九日
元弘二年

後の様を見んために、遙々と訪ね下りたる幼きものを、一目も見ずして果てぬることよ。とばかり宣ひて、その後は曾て諸事につきて言葉をも出だし給はず。今朝までは氣色しをれて、常には涙を押拭ひ給ひけるが、人間のことに於ては、頭燃を拂ふ如くになりぬと覺りて、只綿密の工夫の外は、餘念ありとも見え給はず。夜に入れば、輿さし寄せて乗せ奉り、こゝより十町ばかりある河原へ出だし奉り、輿昇きすゑたれ

日野資朝の墓



ば、少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直りて、辭世の頌を書きたまふ。

五蘊
色・受・想・行・識

五蘊假成形 四大今歸空

四大
地・水・火・風

將首當白刃 截斷一陣風

年號月日の下に名字を書きつけて、筆を擱き給へば、斬手後へ廻るとぞ見えし、御首は敷皮の上に落ちて、體は猶坐せるが如し。この程常に法談なんどし給ひける僧來て、葬禮形の如くとり營み、空しき骨を拾ひて阿新に奉りければ、阿新これを目見て、取る手もたゆく倒れ伏し、今生の對面遂に叶はずして、變れる白骨を見ることよ。と泣悲しむもことわりなり。

六 阿新丸 その二

高野山
紀伊國伊都郡
奥の院
高野山上の東部

阿新未だ幼稚なれども、けなげなる所存ありければ、父の遺骨をば、唯一人召使ひける中間に持たせて、まづ我よりさきに高野山に参りて、奥の院とかやに納めよ。とて、都へ歸しのぼせ、我が身は勞ることあるよしにて、なほ本間が館にぞとまりける。これは、本間が情なく父を今生にて我に見せざりつる鬱憤を散ぜんと思ふ故なり。

かくて四五日經ける程に、阿新晝は病のよしにてひねもすに臥し、夜は忍びやかにぬけ出でて、本間が寢處なんど細々と覗ひて、隙あらばかの入道父子が間に一人さし殺して、腹切らんとするものと、思ひ定めてぞねらひける。

或夜雨風烈しく吹きて、宿直する郎等ども皆遠侍に臥したりければ、今こそ待つところの幸よと思ひて、本間が寢處の方を忍びて覗ふに、本間が運やつよかりけん、今夜は常の寢處を變へて、いづくにありとも見えぬ。又二間なる處に燈の見えけるを、これは若し本間入道の子息にてやあらん、それなりとも討ちて恨を散ぜんと、ぬけ入りてこれを見るに、それさへこゝにはなくして、中納言を斬り奉りし本間三郎といふ者ぞ唯一人臥したりける。よしや、これも時にとりては親の敵なり、山城入道に劣るまじと思ひて、走り懸からんとするに、我は元來太刀も刀も持たず、只人の太刀を我が物と憑みたるに、燈殊に明かなれば、立寄らば、やがて驚き合ふともやあらんずらんと

危みて、左右なく寄り得ず、如何せんと案じわづらひて立ちたるに、折節夏なれば、燈の影を見て、蛾といふ蟲の數多明障子に取りつきたるを、すはや、究竟の事こそあれと思ひて、障子を少し引きあげたれば、この蟲數多内へ入りて、やがて燈を打消しぬ。今はかうと嬉しくて、本間三郎が枕に立寄りて探るに、太刀も刀も枕にありて、主はいたく寢入りたり。まづ刀を取りて腰にさし、太刀を抜きて胸元にさし當てて、寢たる者を殺すは死人を刺に同じ、驚かさんと思ひて、先づ足にて枕をはたとぞ蹴たりける。蹴られて驚く所を、一の刀に臍の上を疊までつと突通し、返す太刀に喉笛をさし切りて、心のどかに後の竹原の中へぞ隠れたり。

本間三郎が一の太刀に胸を通されて、「あつ」といふ聲に、番衆ども驚き騒ぎ、火を點してこれを見るに血のつきたるちひさき足跡あり。「さては阿新殿の仕業なり。堀の水深ければ、木戸より外へはよも出でじ。探し出だして打殺せ」とて、手に手に、松明を點し、木の下、草の蔭まで、残る所なくぞ探しける。阿新は竹原の中に隠れながら、今はいづくへか遁るべき、人手にかゝらんよりは、自害をせばやと思はれけるが、憎しと思ふ親の敵をば討ちつ、今はいかにもして命を全うして、君の御用にもたち、父の素意をも達したらんこそ、忠臣孝子の義にてもあらんずれ、若しやと一まづ落ちて見ばやと思ひ返して、堀を飛越えんとしけるが、口二丈、深さ一丈に餘りたる堀なれば越ゆ

べき様もなかりけり。さらばこれを橋にして渡らんよと思ひて、堀の上に末靡きたる吳竹の梢へさらくと登りたれば、



阿新丸の隠れ松

竹の末堀の向ひへ靡き伏してやすやすと堀をば越えてけり。夜は未だ深し、湊の方へ行きて、船に乗りてこそ陸へ

は着かめと思ひて、たどる浦の方へ行く程に、夜もはや次第にあけ離れて、忍ぶべき道もなければ、身を隠さんとして目を

暮し、麻や蓬の茂りたる中に隠れ居たれば、追手どもと覺しき者ども百四五十騎馳散りて、若し十二三ばかりなる兒や通りつる。と、道に行合ふ人毎に問ふ音してぞ過行きける。

阿新その日は麻の中にて日を暮し、夜になれば湊へと心ざして、そことも知らず行く程に、孝行の志を感じて、佛神擁護の眸マナシをや廻らされけん、年老いたる山伏一人に行合ひたり。この兒のありさまを見て、痛はしく思ひけん、これはいづくよりいづくをさして御渡り候ふぞ。と問ひければ、阿新、事の様をありの儘にぞ語りける。山伏これを聞きて、この人を助けずば、只今の程にかはゆき目を見るべしと思ひければ、御心安く思し召され候へ。湊に商人船ども多く候へば、乗せ奉りて、越後越

中の方まで送りつけ参らすべし。といひて、足たゆめば、この兒を肩に乗せ背に負ひて、程なく湊にぞ行きつきける。〔太平記〕

七 四萬温泉より留守宅へ

七日午後には歸京するつもりに候。

此の地も川添ひの、とんと伊豆の修善寺同様の處にて、あれよりも川ばたの地が狭きところに候

こゝはまた異なりたる風の所にて、宿屋からは唯室を借りるばかり、女をやとひて世帯を持つことに候。何もかも賣りにくるのをつかまへて、鯉節・砂糖・醬油・酒を買ふと云ふ始末。豆腐屋は小さな札一枚を置いてゆく、それを一枚が豆腐一ち

四萬温泉
上野國吾妻郡
四萬村にある
海拔二千尺
修善寺
伊豆田方郡、
狩野川岸にあ
る。温泉及び
範頼頼家遭難
の地として名
高い。

やうに通用するので、あとで勘定すると申す事に候。
温泉宿は只二軒しか無けれど、二軒とも甚だ大きく、いづれも
五百人づゝ位は容れ得るよしに候。客座敷の建坪のみにて、
關即ち私の居る家は百四十坪からあるとの事に候。米味噌
を持つてくるたちの客も澤山に候。

何となく一體の調子が、よほど古風に候。併し物價などは餘
り安いわけでもなく、此の状袋が十枚二錢五厘、萬事御推察あ
るべく候。

湯どのは随分ひろく、湯ぶねも大きく、湯も澤山そこゝに湧
きて、川の中にも、うつかり泳ぐとやけどをする程沸き居り候。
冬などは川から湯氣が立ち、雪もあまり地上には積らぬよし

に候。掘りさへすれば、何處でも湯は出るとの事、少し無氣味
な位澤山御座候。されど地震もなく、火事も起りし事なしと
見え、當家帳場の部分は、元祿年間に建ちたるものの由に候。
こゝより越後の國へ越ゆる道に、日向見温泉といふがあると
の事、これも八町ばかりしか下らぬ故、今に行つて見るつもり
に候。

食べる物は、鮎アサギもなし、鰻ウナギやまめ、鱒マス、鳥野菜の類。人間は悪くは
なけれど、随分バンカラの方にて、とても塔の澤や熱海のハイ
カラ的のとは、比較にならず候。

前橋より宇都宮へきれる横の鐵道あれば、氣が變れば、或は鹽
原へ行くかも知れず候が、そこにきめたらば、其の時はまた御

塔の澤
相模國足柄下
郡湯本村にあ
る。箱根七湯
の一

熱海
伊豆國田方郡
にある温泉場

鹽原
下野國鹽谷郡
簗川水源地の
一。大盤谷にあ
る。温泉場。風
光幽麗

報致すべく候。

此の手紙は四日の晝に出し申候が、いつ着く事にや、随分遅い事と存候故、此の返事には及ばず候。

今日晝前は割合にあつく候。午後になりて只今雨降り來り候。何と申しても、昨夜は可なり厚い夜具をかけて眠り申候ほどにて、蚊は無し、朝夕は樂に候。

今日は東京も暑い事と存じ候。昨日はこちらは寒い位にて候馬よまひしなり。

先づは餘り書く事もなき故、これだけに致し候。親子達者の事と存じ申候。

四萬にて 成行

成行
幸田露伴の名
文學者

君子
露伴妻

君子さま 御もと

(日用名家の手紙)

八 糟糠の妻 その一

照子の始めて予にとつぎし當時は、予の毎月の収入僅かに十五金なりき。されば照子の家計を經營する辛苦辛勞察すべきものありき。此の間、長男を生みて費用多端、窮乏益加はる。予無聊に堪へず、書を著して名聲を江湖天下に馳せんと欲し、叙事文範本稿上を作りて、之を書肆に謀れども應ずる者なし。照子は之を慰めて、これ予が名聲の世に知られざるが故なりとなし、爾來爾來嚴ケンシヤウに家計を節しして、月毎に金三圓を剩し、積むこと一年にして、遂に「文範上卷」を梓しに上せて世に問へり。當時予は以爲へら

く、予が文天下を聳動するに足らずとも、他に比して敢て遜色はあらず」と。然れども當年著書の天下を聳動せしは、其の秘訣、唯廣告の金を惜しまざると、名家の玄關に拜趨するを懶しとせざるとに在つて、其の實質の如きは、殆ど關係なき状態なりしなり。此の書果して賣れず、六百を刷りて四百を餘せり。予大いに焦躁し、かつ照子に愧づ。照子曰く、これ御身が罪にあらず、資薄くして、新聞廣告の足らざるが故なり、時に投ぜざるが故なり。賣れずとて深く憂ひ給ふ勿れ。天下豈一二の知己なからむや」と。當時にありて、予が不平無聊、照子なかりせば、それ何を以てか慰まん。照子は實に予が唯一の知己なりしなり。嗚呼、予が屢死に垂んとせる精神は、照子が眞情の

ために毎に生き、予が將に冷かならんとせる血肉は、照子が熱心の爲に恆に温まれり。照子は常に自ら其の身を苦しめて、予を社會に出さんとする事に努め、其の身は嚴冬に手脚の龜裂を厭はず、盛暑に頭面の燒黔をも嫌はずして、水を汲み、飯を炊き、衣服を洗ひ、かくして婢を畜ふる費を節し、予をして出づるに車あらしめ、其の身は長へに色褪せたる衣を着て、予には新裁の衣を着しめ、其の身は肝膽を碎き、身骨を勞し、棲々營々として、生計の事を處理し、米鹽の有無を計り、予をして煩擾の憂を避けしめ、また生計の費用を減じ、其の餘財をもて、二間の家より三間の座敷を備へたる家に移り、以て予が筆硯のほとりを清涼ならしめつ。凡そ予が心をして、慰め且奮はしむる

の方法については、終始之を講ぜざるはなかりき。嗚呼、予が今日擔へる全身の名譽は、實に照子の與へしものと謂ふべし。然るに照子はみづから敢て之を擔はずして、予に譲り、其の名譽より生ずる報酬を受くるに及ばずして逝きぬ。嗚呼、鄙名や、同人の間に知られ、幸に天下の諸名士と文壇の上に追隨することを得たる今日、予が久しき知己は、已に予を棄てて去りぬ。是豈尋常一様、一箇憐むべき糟糠の妻を喪へるものと同じからんや。予が當時の窮迫を知れる人は、必ず予が照子を悼むの切なる所以を知らん。

照子、貧に習へり。故に近日家計や、餘裕を生ずるに至りても、猶其の身に奉ずること極めて儉なりき。美味を求めず、遊觀を欲せず。衣裳は弊廢に至らざれば更め作らず、孳孳として錢を積み、以て予が爲に、終焉の地を購はんことを計れり。病むに及びて、戯れていふ、人は病むよりも厭ふべきものなし。病む時の事を思へば、無事の日の奢侈は、物の數にもあらず。病癒えなば、わが爲に、新に縮緬の單衣を作りて賜はれ、薩摩上布の帷子も作りて賜はれ、種々の晴衣を着て、溫泉にまた海水浴に遊ばん。と。語猶耳を去らざるに、彼が身に纏へるを見れば、鹿き白布の經帷子、たゞ一重のみ。嗚呼、天は何ぞしかく無情なる。

照子、宅を買はんと欲するの念切なり。其の未だ病まざりし日、村内音無川の邊に、一の賣宅あり。結構堅固、階砌瀟洒、小な

りといへども、優遊^{ユウユ}膝を容るゝに足れり。照子これを購はんといふ。予は其の地を併せて購はんと欲するに、地と家と主を異にし、地主は賣ることを肯^{ケン}んせず、蓄藏の金を計るに、また屋地を併せ購ふに足らず、事竟に諧はず。遂に照子をして家なくして逝かしめぬ。

九 糟糠の妻その二

照子、天資洒落、花卉を愛す。平素、瓶中花を絶やさず。以て自ら樂しみ、また予をして樂しましめたり。其の病中、予美術展覽會に於て、雲州磁の花瓶一箇を購ふ。照子歿するの月十三日、早朝剪り花賣の聲いと涼しきを聞く。呼入れて、花菖蒲數

精
讀
ス
ベシ

祇園祠 京都下京區清井町にある。八阪神社。清水閣 京都洛東。清水寺。詩仙 石川丈山。其の舊居を詩仙堂といひ、山城國愛宕郡一乘寺にある。大雅 畫家池無名の號。玉瀾 大雅の妻。夫と共に畫の名人。黒谷 愛宕郡八瀨村の東にある。本黒谷といひ、洛東神樂岡東南にある。新黒谷といふ。糺森 愛宕郡下賀茂神社にある。杜鵑の名所。嵯峨 山城葛野郡太山附近の沓稱に至る。

莖を買ひ、照子病をつとめて、手づから新購の瓶に挿しぬ。照子が永眠の曉、顧みて床間を見れば、花もまた人と共に萎みぬ。照子また山水の勝を喜び、切りに西京の風景を愛す。去歲東歸するや、時恰も季夏なり。夫妻祖孫相携へて、鴨川の湄に宿り、東山の翠を挹み、祇園祠に賽し、清水閣に詣で、陶工の家を訪ひ、詩仙の跡を尋ね、大雅・玉瀾の遺芳を攬し、黒谷糺森に嘯吟して、嵯峨嵐山に諷詠す。照子戀々として去るに忍びず、慨然としていへらく、再び睡眠を山翠に揩^{スグ}ひ齒牙を清流に嗽^スがん日はいつぞ。人生はさはり多し。また來ん夏も、此の地に遊ぶことを得んや否や。と。嗚呼、人生果してさはり多し。照子は卒に不可回の一大障礙に遭ひたり。歲月人間促、烟霞此地多、

九 糟糠の妻その二

年月久し、色も四ツ、色も外、地多

嵐山
山城葛野郡松尾村の一小山、大堰川麓を流る

慇懃竹林寺、能得幾回過。到る處、照子の爲に誦せらるゝは此の詩句なり。嗚呼、山も水も悉く慘煙悲風に鎖されたり。予は再び西京の地に遊ばんか、はた永遠に遊ばざらんか。

照子また骨董を喜ぶ。曾て一舗に於て、一古銅の香爐を購ひ來れり。古色掬すべく、靄然として撫摩するに堪へたり。照子、毎早盥沐已に畢れば、必ず此の爐に香を薫じて、予が机邊に置きぬ。嗚呼、照子豈終に此の香爐に、其の身のかたみなる靈牌を薫ぜらるゝを知らんや。予もまた安んぞ此の照子が遺愛の香爐に悲しき照子の靈牌を薫ずる日あるべしと思はんや。

照子手工に巧みなり。家政を料理し、衣服を裁縫ふの暇、また

梅

張

山サ
夕文

萱氏
母のこと

其の良人、其の姑、其の愛兒のために親ら足袋を作る。照子既に歿して、匣中を閲するに、予が爲に新に作りし足袋の未だコハゼを施さざるもの十餘雙に及べり。而して彼が未だ足を容れざるものは、半雙を見ず。萱氏泫然として曰く、「吾が婦は眞に賢婦なりき」と。

中元將にちかづかんとす。侃、茄子を剪りて牛となし、瓜を摘みて馬となし、謠うてこれを牽く。「何のためにするぞ」と問へば、曰く、「かあちゃんを迎ふるなり」と。予爲に悽然たり。嗚呼、獨り侃のみならざるなり。予もまた此の孟蘭盆會には、世俗の習に従ひて、茄子の牛、瓜の馬を作りて、照子の靈を迎へんと思ふなり。嗚呼、これ何等の狂愚ぞや。時にみづから翻然と

孟蘭盆會

毎年七月十五日、過去七世の父母の爲に飲食を設けて佛及び僧を供養すること

して悟り、洒然として笑ふことなきにあらざれども、かの照子の瘁盡せる身體が、瓜馬、茄牛に扶けられて來る姿の、何故か隱然として腦裏に結晶せられ、朦朧として眼中に映じ來りて、自ら思ひ絶ゆること能はざるなり。子は母に後れて慧兒となり、父は妻を喪ひて愚人となれり。

照子歿する前月二十一日の夕、照子、病間、涼に乗じて端居す。此の日恰も陰曆十四日、照空水のごとく月色殊に佳かりき。月を踰えて照子歿し、通夜籠りをなすの夜、また恰も此の日に當れり。明月軒端に臨み、清風佛燈を煽り、人の感傷を拈起して、坐ろに胸に逼らしむ。

かくれにし月はめぐりてきにしかど

貞信公

藤原忠平。左大臣にて攝政し、太政大臣關白に至る。天曆三年薨、七十歳

影にも人は見えざぞありける

貞信公

貞信公は豪傑の士なり。其の文は天下を經綸し、其の武は鬼神をひしぐに足れり。なほかつ其の内を傷悼せしこと斯くのごとし。予何を以てか痴愚の嘲を辭するの暇あらん。嗚呼。

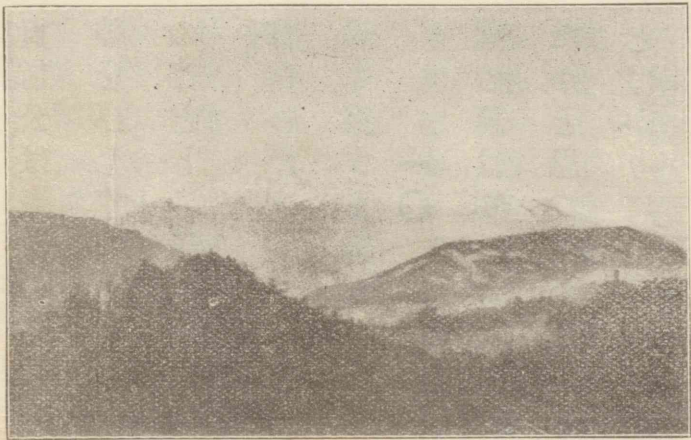
(宮崎三昧の文に據る)

御嶽山

信濃木曾谷と飛騨國とに跨る。海拔九八四一尺

一〇 御嶽山頂の雲

雲の翼は、初は徐々として遠山を覆ふやうにして、擴がつて來たかと思つてゐると、忽ちに谿からの怖ろしい風が、一陣どつとばかりに、絶頂の劍が峰の岩角に突當つて來た。小石ががらがら音を立てて、深い谿底へ落ちて行くと、岩の間に隠れて



みた雷鳥が、すつと風の前を突切つて飛んだ。雲は此の不意
 打の風に、一層低くくひらつくや
 うにして、隙があらば此の劍が峰の
 御 絶巔を襲つて來ようと待構へてお
 るやうに、岩角々々に腹をすらせて
 獄 爬ひよつて來る。黙々たる其襲來
 の姿！瞬間前に見えてみた、つい近
 山 く地獄谿を隔てての岩角も、既に其
 の雲軍の包み隠す所となつてしま
 つた。右手に稍、遠く、黒い水を光ら
 せてみた二つの池の上にも、上から逆落しに攻落ちて來る不

呪文
(まじない文)
(まじない文)

思議な雲の手が、もうその水の面まで縦横に伸びて來た。四
 方から攻寄せ攻寄せて來る雲の軍勢！その中を事々しく、物
 に取りつかれたやうになつて、行者等の鈴の音が響きわたる。
 呪文と鈴聲と、此處に一團彼處に一團と、白衣の行者どもは集
 り集つて、襲ひ來る雲の軍勢を拂ひ除けようとする如く、聲を
 限りに呼立てて居る。
 が、無言の雲軍は岩を埋め谿を覆ひ、一步々々地を占めて、刻刻
 に進んで來る。また一陣風が吹起ると、雲の先頭はやゝ亂れ
 て、右往左往に頭を振つて迷ひ出すが、その風が吹過ぎたあと
 からは、時々前よりは一層勢ひ鋭く、稀薄な空氣を突裂いて、一
 氣に攻寄せて來る。偏に山の背後からばかり攻めてみた雲

は、いつか前面に廻つて、爬松の上に滑り、砂礫の上を包み、うねうねと一列を作つて、下から登つて来る道者の姿を、其のうちに隠見させて、絶頂目がけて攻上つて来る。風は初め谿から谿へと吹入つて、絶頂から少し下を、山をめぐつて吹いてゐたのが、今は雲の上を壓して、絶頂より遙か遠く、直ちに高い天空に吹去つて行く。その風の下を雲は爬ひつ滑りつ押寄せて、今ではたゞ劍が峰の頂上の一角、社の立つ一團の岩を残すばかり、全山たゞ雲を以て包んでしまつた。遠巒も見えず、空も見えず、日も見えず、其の雲の中を、陰にこもつた呪文の聲と、澄んだ鈴の音とがひひいてゐるばかり、さあつくくと鳴る風の音、雲を吹きやぶり岩角を突きくづさうとする冷たい風の音

今はたゞ天地は一帶に雲の銳鋒、その中に包まれた小さな人の聲も鈴の響も風の音も、何ともする事が出来ない。得意な雲は總べてを覆ひ包んで、草も木も石も岩も、風までも人までも、有らゆる生物を自由の翼の下に壓へて、いつまでもその儘に續けて行きさうに見えるが、風の音は次第に強くなつて来た。上から押へようとする雲の厚衾と争つて、跳除け突破り、再び自在な自己の天地を見出さうとする様に、風は勢ひ猛に吹起つて来る。風と雲との烈しい争、人は其の中に包まれて、岩角にすがり木蔭にひそみ、纒かに呼吸を繋いでゐるばかり、危く吹飛ばされ雲に卷かれて、千丈の谿底へまるびさうになる。と、その中に、雲の軍勢の一端がはしなく突破られた。伏

してゐた風の力は、此の時全體を一つところに集めてどつと吹出でる。雲は惶て上から押しつぶせようとするが、及ばない。風は益、力を得て、その雲の破目から吹いて吹捲くる。一軍が破れると、後からく一軍々と攻寄せくて来るが風は愈、強く、上に下に遠く近く、天上までも谿底までも、荒れまはり狂ひ廻つて、雲の軍を吹散らさうとする。日は此の時風に力を得て、さあつと鋭い光を上から投掛ける。光は澄んで青白く、純白な雲の頂は、一樣に目醒めたものの如く、頭を上げてその光を仰ぐ。人は其の雲の中から吐息をつきながら、仰いで此の光を吸込まうとする。日のある周圍、天上は紫に輝いて、その氣高い光は瞬時下界の烈しい争鬭の何物を

も忘れしめる。

紫の空は次第にその領土を擴げて行く。日の光は次第に強く、白雲は随つて長く伸びて、天の裾遠く、一帶の山の頂が浮ぶやうにあらはれて来る。風はまた一しきり勝者の聲をあげて鳴渡る。山上の雲は今しばし姿を亂して西方に散るが、直ちに陣を整へて、また絶頂目がけて攻上る。かくてまた果てしなき風と雲とのあらそひ、その中を呪文の聲を張りあげ鈴を鳴らして、人ははね飛ばされまいと爬ひまはつてゐる。

(吉江孤雁)

吉江孤雁
名は喬松。文
學者

一一 太田道灌

大山
相模國中郡に
ある、海拔四
一二五尺
太田道灌の
墓
洞昌院内にあ
る

明治四十四年の夏われ大山に登りて、脚下に關八州を望み、下りて山麓の上粕屋村に、太田道灌の墓を訪ふ。嗚呼、道灌は四百年の昔、八州の野に騁馳したりし英雄なり。然るに今や何處にかある。五輪の小塔古びて苔を帯びたり。墓前の二大老松は、何人の手向けしものによ。

太田道灌と云へば、何人も江戸城を連想するなるべし。江戸城今や皇居となれり。皇居となるの前三百年の間は、徳川幕府の在りし處なり。而して之を創めたるは太田道灌なり。

わが庵は松原つゞき海近く

富士の高根を軒端にぞ見る

徳川幕府以後こそ、江戸城は海より遠ざかりけれ、道灌の頃に

は海に接したりき。我が國の城と云へば、必ず山城なりしに、平地の城、而も海に接したる城、而も富士の高根を軒端に見る

城、これ當時にありては實に破天荒なり。

孤鞍衝雨入茅茨

少女爲贈花一枝

少女不言花不語

英雄心緒亂如絲

太田道灌像



孤鞍云々の
詩
大槻清崇の詠

これ道灌の故事を詠じたるものとして、頗る人口に膾炙す。道灌曾て獵して雨に逢ひ、農家に就いて蓑を借らんことを乞ふ。少女いで來り、山吹を呈したるだけにて、何とも言はず。

道灌空しく歸り來りて、左右の人々に此の事を話せば、
「そは古歌に、

七重八重花は咲けども山吹の

みの一つだに無きぞ悲しき

とある心ならん」とありければ、道灌さてはと悟り、これより和歌を學び始めたりと云ひ傳ふ。されどこれ一種の傳説に過ぎず。道灌の父資清は文武の達人なり。殊に和歌を善くしたり。道灌も父の教を受けて、幼時より和歌を學びたるなり。道灌曾て小机城を攻む。敵は大勢にして、味方は小勢なり。衆皆其の勝算なきを云ふ。道灌曰く、善く兵を用ふるものは兵の多少に由らず。勢に乗ずるに如かず」とて、

七重八重の歌
後拾遺集、兼明親王の詠、第五句は「無きぞあやしき」とある
資清
谷上杉氏の臣。源頼政の裔。資房の子、和歌連歌を好む。明應二年歿八十三歳
小机城
武藏橋樹郡小机村にある。小田原北條氏の笠原氏の居

小机は先づ手習の始めにて

いろはにほへとちりトになる

といふ狂歌を作りて一軍を勵まし、果して城を陥るゝを得たり。

藤澤の役、大いに上杉憲直の兵を破れり。我が將中村重頼、敵の一將と闘ひ、その首を獲て歸る。年いまだ弱冠ならず。艶

麗雅美、鬢髮馥郁たり。道灌哀惜に堪へず。

かゝる時さこそ命の惜しからぬ

かねてなき身と思ひ知らずば

重頼も之に和して、

なき身とは誰も知れども諸共に

藤澤の役
藤澤は武藏大里郡人見原、この戦役は康正元年(二一五)冬の事
上杉憲直
或は憲定といひ、憲宣といふ。傳記不詳
中村重頼
もと京家の人、上杉氏に身を寄せた

上杉定政

扇谷上杉家第六代の三子明應二年山内上杉顯定と戦ひて死んだ、五十二歳

廳南城

長生郡にあつた。武田信長茲に城き、徳川氏の初世に至つた

遠くなり

の歌

作者不詳。下句或は「鳴く音に潮の満干をぞ知る」ともいふ

義政

足利第八代將軍延徳二年薨す、六十四歳

いまはに及ぶことをしぞ思ふ

上杉定正、上總の廳南城を攻む。夜、海崖を過ぐ。敵、石弩を崖

下に設けて之に備ふ。定正騎を駐め、人をして潮の満干を視

しむ。衆疑懼して進まず。道灌請ひて赴き、幾くもなく歸り

報じて曰く、「潮干たり、軍を行るを勞せず」と。定正その故を問

ふ。道灌曰く、「古歌に、

遠くなり近くなるみの濱千鳥

潮の満干を聲にてぞ知る

とあり。これにて潮の干たるを知るなり」と。

嘗て義政に見えんとて上京せし時、我が庵はの歌を始め、

露おかぬ方もありけり夕立の

空よりひろき武藏野の原

年ふれどわがまだ知らぬ都鳥

隅田川原に家はあれども

などの歌を叡覽に達し、左の御製を賜はれり。

武藏野は茅原の野と聞きしかど

かゝる言葉の花もあるかな

道灌は武あり、文あり、智あり、略ある、眞個の名將と謂ふべし。

(大町桂月)

わがまだ知らぬ

此の一句「まだ知らざりし」とも傳へてゐる

叡覽

後土御門天皇

大町桂月

名は芳衛。文學士、文章家

一二 平家のあはれ

一、故郷の花

式津

今の大阪市西區安治川口、江子島邊の總稱

三位中將

平維盛、重盛の長子

大臣殿

平宗盛、清盛の次子

落ちゆく平家の人々、或は式津の浪枕、八重の潮路に日を経つ
つ、船に棹さす人もあり。或は遠きを凌ぎ近きを分けつつ、駒
に鞭うつ人もあり。前途をいづこと定めず。生涯鬪戦を日
に期して、思ひく心々にぞ下り給ふ。
權亮三位中將の外は、大臣殿を始め奉りて、然るべき人々は皆
妻子を引具し給ひたりけれども、下様の者共は妻子を都に留
め置きしかば、各別を悲しみつゝ、行くも留るも互に袖を絞り
けり。唯かりそめの別離をだにも怨みしに、後會其の期を知
らざりけるこそ悲しけれ。相傳譜代のよしみ淺からず、年來
日比の重恩も争でか忘るべきなれば、人なみなみに涙押へて
出でたれども、心は都に通ひつゝ、行くも行かれぬ心なり。

淀の大渡
山城國久世郡

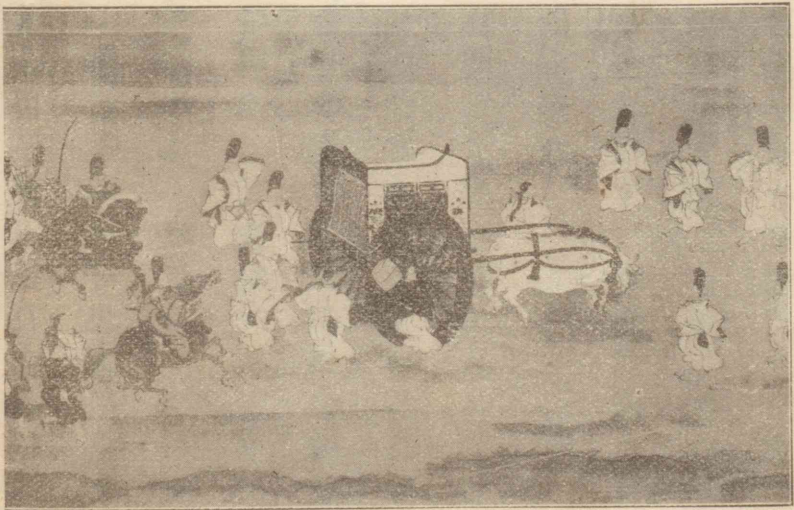
經盛
清盛の弟

淀の大渡にては、南無八幡三所大菩薩、再び都へ返し入れ給へ
と、各伏拜み給へども、神慮誠に知り難し。薩摩守忠度、故郷の
家々煙とのぼるを顧みて、
古郷を燒野の原にかへりみて、
すゑも煙のなみちをぞゆく
修理大夫經盛
はかなしや主は雲井に別るれば
やどは煙と立ちのぼるかな
或宮女泣くく口ずさみ給ひける、
住みなれし都の方はよそながら
袖になみこすいその松かぜ

俊成
藤原俊忠の子
定家の父。正
三位皇太后宮
大夫であつた
家が五條室町
にあつたので
五條三位と稱
せられた

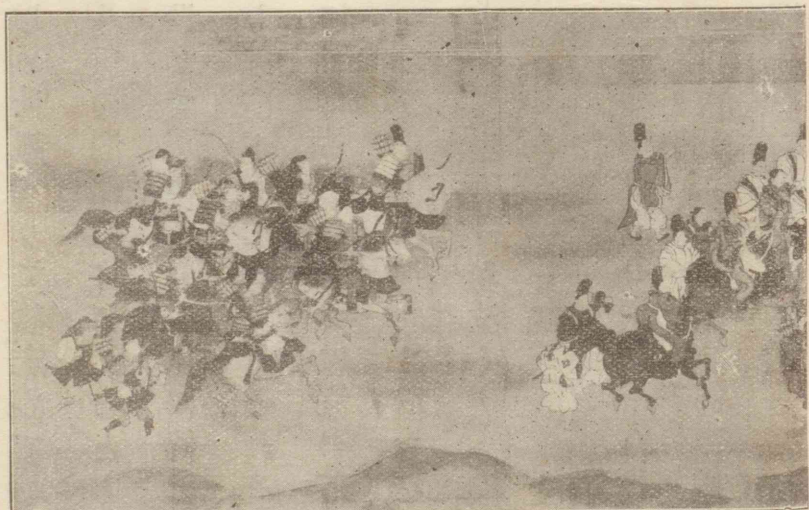
是を聞きける入々、愈、袂を絞り
けり。
入道の舍弟薩摩守忠度は、淀の
河尻まで下りたりけるが、郎等
六騎相具して、忍びて都へ歸り
上る。如法夜半の事なるに、五
條三位俊成卿の宿所に行きて
門を叩く。内には是を聞きけ
れどもかゝるみだれの世なる
上、いぶせき夜半の事なれば、敲
けども開けざりけり。餘りに

平 家 の



強く敲きければ、やゝ久しくあ
りて、青侍を出し、戸をひらかで
之を問ふ。「忠度と申す者、見參
に申し入れたきことありて參
りたり。」と答へければ、三位大庭
に下り、世に恐れて内へは入れ
ざりけれども、門をば細目に開
けて對面あり。
忠度宣ひけるは、「かゝる身とし
て、御ため憚あれども、所詮一門
榮華盡きて都に安堵せず、西海

都 落



勅撰

昔カラ今ニテノ歌ヲ
ヨイノラヨリヌイテ

へおち下り侍り。亡びん事疑なし。世静まりて後定めて勅撰の沙汰候はんか。たとひ身は八重の潮路の底に沈むとも藻鹽草かき置く末の言の葉後の世までも朽ちぬ形見に傳はり侍れかしと思ひ出でて、河尻より忍び上りて侍り。これぞ年ごろよみ集めたりし愚詠どもにて侍る。身と共に波の下にみくづとなさん事、遺恨に侍り。之を砌下に進らせ置き候。勅撰の時は必ずおぼし召しいでよ。とて、卷物一卷泣くく鎧の引合より取出でたり。

浮生を萬里の波に隔つとも、御形見をば一戸の窓に納めて、勅撰の時は思ひ出で侍るべし、とのたまへば、忠度、今は身を波の底に沈め、骨を山野に曝すとも、思ふ事なし。とて、馬にのり、古詩を、

前途程遠、馳思於鴈山之暮雲、

後會期無、霑纓於鴻臚之曉淚、

とうち上げうち上げ詠じつ、南を指してぞおち行きける。

本文には「後會期遙」と書きたるを、忠度還り見るべき旅ならず、今を限りの別なりと思ひければ、「後會期無」と詠じけるこそ哀れなれ。

三位もなごりの惜しくして、遙かに之を見送りても、あはれ世

古詩
大江朝綱が
「於鴻臚館」
「饒北客」序
の中の語

千載集

勅撰歌集の一
二十卷。後白
河院の院宣に
よつて撰集し
後鳥羽の文治
三年（一八四
七）奏覽する

志賀の都

天智・弘文二
帝の都せられ
た所、都址は
近江國滋賀郡
滋賀村大津町
御所村に互る

に在りしには、此の人どもにこそ詔ひ追從せしに、かはる習とて、今は門を隔つる事の悲しさよ。」と、哀れなるにも涙、優なるにも涙、忍の袖をぞ絞られける。

世靜まりて後、千載集を撰まれけるに、忠度の此の道を嗜み、河尻より上りたりし志を思ひ出で給ひて、「故郷の花」と云ふ題に、「よみ人しらず」とて一首入れられたり。

樂浪や志賀の都は荒れにしを

昔ながらの山ざくらかな

とよめる歌なり。名字をも顯はし、あまたも入れまほしかりけれども、朝敵となれる人のわざなれば憚り給ひて、只一首ぞ入れられける。亡魂いかに嬉しく思ひけん、哀れにやさしく

ぞ聞えし。

源平盛衰記

一、小枝の笛

一の谷

攝津國武庫郡
平氏が據つて
搦手とした處
熊谷直實
源頼朝の臣、
後、僧となり
蓮生と號した

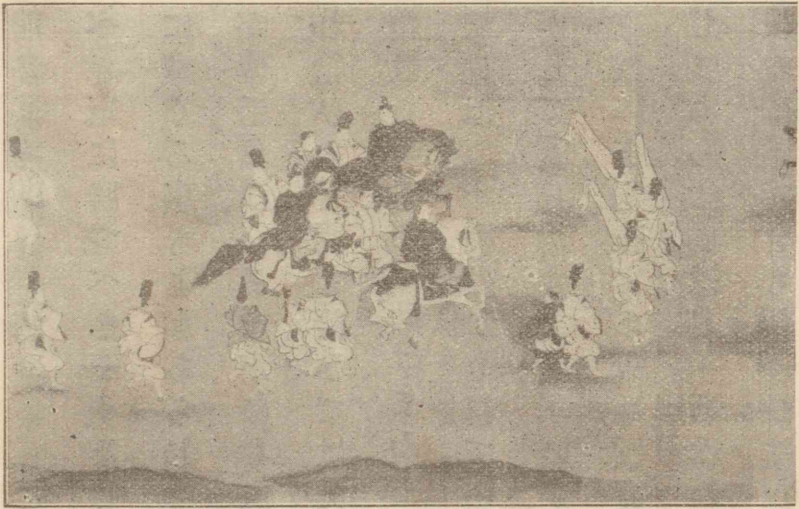
一の谷の軍敗れしかば、武藏國の住人熊谷次郎直實、平家の公達、助船に乗らむとて、汀の方へ落ちゆき給ふらむ、あつばれ、好き大將軍に組まばやと思ひ、細道にかゝりて、汀の方へ歩まする所に、こゝに練緯に鶴ぬひたる直垂に、萌黄匂の鎧着て、鍬形打ちたる兜の緒をしめ、金づくりの太刀を佩き、二十四さいたる截生の矢負ひ、滋籐の弓持ち、連錢葦毛なる馬に、金覆輪の鞍置きて、乗りたりける者一騎、沖なる船を目にかけ、海へ颯とうち入り、五六反ばかりぞ泳がせける。

熊谷、あはれいかに。好き大將軍とこそ見參らせ候へ。まさ

小次郎
直家をいふ。
一の谷の合戦
に父に従つて
戦場にあつた
時に年十六



なうも敵に後を見せ給ふもの
かな。返させたまへ、返させま
へ。」と、扇を揚げて招きければ、招
かれて取つて返し、汀にうち上
平らむとしたまふ所に、熊谷、波う
ち際にて押並べ、むずと組み
家どうと落ち、取つて抑へて、首を
かゝむとて、兜をおし仰けて見
たりければ、薄化粧して鐵漿黒
のなり。わが子の小次郎の齡ほ
どして、十六七ばかりなるが、容



顔まことに美麗なり。「抑、如何
都なる人にてわたらせ給ひ候や
らむ。名乗らせたまへ。助け
参らせむ」と申しければ、「まづ、か
ろういふ和殿は誰ぞ。」物その數
にては候はねども、武藏の國の
住人熊谷の次郎直實」と名のり
申す。「さては汝が爲には好い
かたきぞ。名のらずとも、首を
取りて人に問へ。見知らむず
るぞ。」とぞ宣ひける。

熊谷「あつばれ、大將軍や。この人一人討ち奉りたりとも、負くべき軍に勝つべきやうなし。また助け奉りたりとも、勝つ軍に負くる事もよもあらじ。今朝一の谷にて、我が子の小次郎が薄手負ひたるをだにも、直實は心苦しく思ふに、この殿討たれ給ひぬと聞き給ひては、父母の君たちさこそは歎き悲しみ給はむずらめ。助けまゐらせむ」とて、後を顧みたりければ、土肥梶原五十騎ばかりにていで来る。熊谷涙をはらくとながして、「あれ、御覽候へ。いかにもして助けまゐらせむとは存じ候へども、味方の軍兵雲霞のごとくに満ちて、よものしまゐらせ候はじ。あはれ、同じうは直實が手にかけて奉りて、後の御孝養をも仕り候はむ」と申しければ、只、何様にも、疾う疾

土肥
次郎實平
梶原
平三景時

う首を取れ」とぞ宣ひける。熊谷、餘りにいとほしくして、何處に刀を立つべしとも覺えず、目もくれ、心も消えはてて、前後不覺に覺えけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣くく首をぞ搔きてける。「あはれ、弓矢取る身ほど口惜しかりける事はなし。武藝の家に生れずば、なにしに只今かゝる憂き目をば見るべき。情なうも討ち奉りたるものかな」と、袖を顔におし當てて、さめくと泣き居たり。

首を包まむとて、鎧直垂を解きて見ければ、錦の袋に入れられたりける笛をぞ腰にさゝれたる。「あな、いとほし。この曉城の内にて管絃したまひつるは、この人にておはしけり。當時味方に東國の勢何萬騎あるらめども、軍の陣に笛持つ人は

竹
管
絃

竹管、フエ、タイコ
糸、コト、ヒワ

大將軍
源義經

忠盛
平正盛の子、
清盛・經盛等
の父

よもあらじ。上臈はなほもやさしかりけるものを」とて、これ
を取つて大將軍の御見參に入れたりければ、見る人涙を流し
けり。聞けば、修理大夫經盛の乙子大夫敦盛とて、生年十七に
ぞなられける。それよりしてこそ、熊谷が發心の心はいで來
にけれ。件の笛は、祖父忠盛笛の上手にて、鳥羽の院より下し
賜はりしを、經盛相傳せられたりしを、敦盛笛の器量たるによ
りて持たれたりけりとかや。名をば小枝と申しけり。狂言キョウゲン
綺語の理といひながら、遂に讚佛乘の因となるこそあはれな
れ。物ヲカキテモテモトク
佛の徳ヲホム
佛の徳ヲホム

(平家物語)

一三 泉

エルサレム
パレスチナの
都府。地中海
岸から約三五
哩、キリスト
の墳墓がある
ナザレ
キリスト幼時
の居住地
パレスチナ
アジアトルコ
の西南・シリ
アの地中海岸
地方

私は六月初、エルサレムから馬で三日の旅をして、ナザレへ行
つた。午後の日さかりには、大抵泉に近いおほきな無花果の
かげに休んだが、それでもパレスチナ六月の暑氣は、腸加答兒
後の私を非常に悩ました。皮膚に感ずる暑熱もだが、眼から
腦に傳はる暑さは實にたまらぬ。山は白つぽい石灰岩質の
山路は白つぽい石路、木すら橄欖なんかは白つぽい緑で、空は
たゞけばかんかん鳴りさうな、ほんの愛想の雲の片だもない
露骨な青天。土造の家は案外涼しいが、見る眼には唯白つぽ
く光つて、要するに、眼のむかふ所盡くこれ白熱地獄である。
見るく眼がちらちらする。頭がくらくくして來る。咽喉
がいらくする。水、水、水が欲しい。水は容易にない。無い

活ける水
舊約全書第十
六章にある語

と思ふと、ますます劇しく渴いて来る。飢渴と一口に云ふが
飢は渴より餘程手ぬるい。餓死はまだ好い。渴死は死んで
も浮ばれない。日本の様な水に不自由せぬ國では、本當に水
の有難味は分らぬ。聖書に所謂「活ける水」生命の水の譬喩の
眞味は、パレスチナの様な處でなければ、眞劍に味はへない。
理窟でも何でも無い、實際パレスチナでは、水が即ち生命であ
る。昔から命がけて井戸を争つたりしたのは無理がない。
私がパレスチナを旅した頃は、あちらの雨期が過ぎたばかり
の時、泉は處々に滾々と湧いて居た。泉の目標は茂つた緑
である。緑の中には必ず泉が隠れて居る。泉は大抵大きな
圓石或は角石で馬蹄形に周圍を壘み、出口を一方に開いてあ

シリヤ
アジアトルコ
の州、小ア
ジアの南、地
中海とアラビ
ヤとの間に介
在する
サマリア
エルサレムの
西北部にある

ヨセフ云々
この事は舊約
全書創世記第
三十七章にあ
る

る。銀錢を瓔珞の様に聯ねて、頸飾或は腕飾にして、色の淺黒
い眉の濃い、黒眼の凄い、險な顔のシリヤ女が、昔リベカやサマ
リヤの女がした様に、素焼の甕を頭に載せ、素足で水を汲みに
来る。或は流れ口で洗濯をしたり、又は所謂井戸端會議をや
つて居る事もある。羊や驢馬や、杏の荷を積んだエルサレム
行の駱駝が、落水の溜に頸さしのべて居ることもある。ドタ
ンの泉が忘れられない。それはサマリアの山路が、今二里餘
りで下ガラリヤの平野に出ようと云ふ處で、昔ヨセフが、父ヤ
コブの命により、十人の兄を探して來て捉へられ、埃及の人買
に賣られた舊跡である。此の日は朝陰に、かのヤコブの井戸
に近いサマリアのナブルス町を立つて、サマリアの舊都セバ

スチューを見て、シレーと云ふ村で晝食晝眠し、然る後また馬に乗つたが、午後の熱はまた格別で、唯一吹の風もなく、私は馬上に疲れ果てた。案内者も馬子も初はやけに歌つて居たが、到頭黙つてしまつた。人間三人、馬三疋、煎りつける日の下を、唯喘ぎに喘いで行く。三時稍、過ぎる頃でもあつたか、丘の角を一廻りすると、長い袋の様な浅い谷が現はれた。谷は爪先上りになつて、向ふの低い丘の麓に盡きて居る。眼をあげて先づ嬉しく見たのは、其の丘の麓に、ほんの一簇だが、こんもり茂つた緑の森であつた。緑も緑、染めた様な、水が滴りさうに嫩かで、しかも眼がさめる様に鮮かな緑の森であつた。其の梢から、修道院らしい建物が少し見えて居る。此の森を見た

天主教
ローマ法王を
教長に仰ぐ一
派のキリスト
教を日本では
舊教と稱す

ばかりで、私の沸つた頭が冷えて來た。私の乗つた白馬が足搔を早め出した。そろ／＼胡瓜の畑なぞが見えて來た。百姓が水をかけて居る。パレスチナの空氣は餘りに乾燥透明で、近く見えても中々遠いが、それでも到頭其の緑の森に來た。無花果・桑・石榴・杏・ポプラ・葡萄などの廣い葉や小さい葉が、艶々と潤うた緑を重ねて、あたりの白熱世界に、唯一點の緑の島を作つて居る。此の様に眼がさめる様な緑は、餘程潤澤な水の養を待たなければならぬ。果然數歩にして緑の源に來た。それは徑一丈もありさうな泉だ。水が満々と湛ひて溢れて居る。と見れば、頭の中央を刺つた天主教の修道僧が二人、白い體を泉に浸して、首だけ出して居るが、周圍の石に綱を

ミレージ
蜚氣樓のこと

かけて、それにぶら下つて居るのを見れば、泉の深さが思はれた。泉の傍には僧衣が脱捨ててある。乗捨てた二疋の驢馬が草を食うて居る。私は旅僧が羨ましくなつた。私の馬は遠慮なく泉の溢れ口にあつい蹄を踏入れて、長い頭をさしのべ、鼻を鳴らしながら、長くくく水を吸うた。飲みながらずん泉に寄るので、裸僧が泉の中から叱々と叱つた。案内者は、此の泉が即ちヨセフが兄達に打込まれた穴の跡だ、と言ふ。そんな事はどうでもよいが、場所も好し、水も多し、本當に好い泉だと思つた。旅僧等の様に眞裸になつて飛込まずに、此のままに過ぎるのが残念だつた。今も堪へ難い暑い日は、なつかしいドタンの泉が、一瞬間ミレージになつて、私の眼前に現

徳富蘆花
名は徳次郎。
小説家、文章家

アンブルサ
イド
ウキンダーメ
ニア湖の北端
にある小邑
ウキンダー
メニア
イギリスのラ
ンカシャー州
とウエストモ
ランド州との
境にある湖

はれる。それから其の夜泊つたエニンの泉も好かつた。エニンは、サマリヤの山がガラリヤの平野に盡きる處で、疎らに棕櫚の立つた村である。宿のすぐ前に泉が湧いて居た。泉を出ると、水は最早四尺ばかりの流水になつて、潺湲と音を立てて流れた。十四夜の月明りで、宿の庭から見て居ると、甕を戴いた婦人の影や、杖を持った牧者の影や、羊や牛や驢馬の影が、水聲、月光の中に、薄墨の映畫の様に、往つたり來つたりして、何とも云へぬ面白い夜であつた。
(徳富蘆花―新春)

一四 湖畔の感想

私は或夕暮、アンブルサイドの宿を出て、ウキンダーメニアの

湖畔を夜の更けるまで物思ひつゝ、逍遙した。牛が小舎に歸つたあとの牧場を、一筋細くどこまでも辿つて行くと、柔かな青草に夜の露がしつとりと落ちて、何處からか薔薇の花の香が漂つて來た。目を上げれば山は四圍にあつた。何とも云ひやうのない静寂の感が、高い山の頂に宿つてゐる。

小徑をどこまでも行きつくせば森があつた。夜目にも美しい夏姿をした英國の若い男女が、幾組となく楽しげに歩いてゐた。私には、彼等までが其のまゝの姿で、靜な自然の中に織込まれた晝のやうにも思はれた。森を出てスコツチ風の石垣に劃られた道を暫く行きつくすと、懸て桃色の美しいカーテンに灯の映る家々の立並ぶ小村のはてに、大きなウキンダ

ーメーアが鈍い銀色をして横はつてゐた。

私はひたくとさゝ浪の寄せる岸邊に立つて、遠く霧の中にひろがる湖の果に目を落した。近くには蘆の葉が夜風にそよいでゐた。見てゐるうちに、霧の中から櫂の音が、夜の沈黙を破つてゆるやかにひゞいて來ると思ふと、黒いボートの影が蘆の中から現はれたりした。多くは男が櫂を取つて、涼しさうな白い夏服の女等が舵綱を操つてゐた。

一つ二つボートが岸についてしまふと、あとはくつきり靜になつて、物音一つ無い夕闇の中に、靜な水が鈍い薄明を流してゐた。蘆の葉づれの音だけが思ひ出したやうにざわくと鳴つた。夜の色は見るまに濃くなつて行つた。霧が湖の上

を這ひだした。

ちつと岸邊に立つて靜かな夜の中に眠つて行かうとする湖の色を見てみると、私の心はだんく物悲しくなつて來た。何とも云へぬ大きな無常感が、心の底の方から湧上つて來た。物我の世界に齷齪する人間と云ふ憐なもの淋しい運命を悲しむ心が、しみとと湧上つて來た。私は此の靜かな湖畔に來る前の、倫敦における自分の生活を考へて見た。そこにはたゞ、目まぐるしいばかりの、政治やら經濟やらの變轉し行く世相の中に没頭して居る自分を見出すばかりであつた。けれども私は、決して物質の世界に齷齪する自己を、嘲笑するものではない。社會は私に取つて、やはり大きな二六時中の

關心事である。けれども私たちの心には殺したり、奪つたり、争つたり、泣いたり、笑つたりする日常の生活の、他にやはりかう云ふ大きな自然の前に立つ時、思はず形而上の何者かを思ふ心の芽が伸びようとする。私は其の何れの心も眞實だと思ふ。そして其の一方だけに囚はれて一方を排斥し去るものは、結局人間の全部を理解し得ないものだと思つた。解き難い多くの現時の社會問題を解かんが爲には、結局其の鍵は片輪の鍵であつてはならない。本當に人間の心の底からの安心と要求とを満たし得る萬全の鍵だけが、此の問題を解く唯一のものとなるであらう。

（下田將美―山上の展望）

下田將美
時事新報記者

一五 仁和寺の法師

一 石清水 八幡 八景ニアリ

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心うく覺えて、ある時思ひ立ちて、たゞひとり徒歩よりまうでけり。極樂寺・高良などを拜みて、かばかりと心得てかへりにけり。さて傍の人に逢ひて、年ごろ思ひつること果し侍りぬ。きゝしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも參りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん。ゆかしかりしかど神へ參るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。といひける。少しの事にも先達はあらまほしきことなり。

二 鼎かづき

仁和寺
山城國葛野郡
花園村にある
光孝天皇の勅
願寺
石清水
山城國綴喜郡
男山にある石
清水八幡宮
極樂寺・高
良神社
二つとも男山
の山麓にある

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名残とて各あ



けて血垂り、たゞ腫れに腫れて、息もつまりければ、打割らんと

そぶ事ありけるに、酔ひて興に入
る餘り、傍なる足鼎を取りて頭に
浮 被きたれば、つまるやうにするを、
田 鼻をおし平めて顔をさし入れて、
一 舞出でたるに、満座興に入ること
蕙 限りなし。暫し奏でて、後、抜かん
筆 とするに大方抜かれず。酒宴事
さめて、いかがはせん。とまどひけ
り。とかくすれば、首のまはり缺

すれどたやすくわれず、響きて堪へがたかりければ、叶はで、すべき様なくて、三足なる角の上に帷子を打掛けて、手を引き杖を突かせて、京なる醫師がりゐて行きけり。

道すがら人の怪しみ見る事限りなし。醫師の許に差入りて、向ひ居たりけん有様、さこそは異様なりけめ。物をいふもくゞもり聲にひゞきて聞えず、「かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなし」といへば、また仁和寺にかへりて、親しき者老いたる母など、枕がみに寄りゐて泣悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝるほどに、あるものいふやう、たとひ耳鼻こそきれうすとも、命ばかりはなにか生きざらん。たゞ力を立てて引きたまへ」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔

てて、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻は缺けうげながら抜けにけり。からき命まうけて、ひさしく病み居たりけり。

(吉田兼好「徒然草」)

吉田兼好
鎌倉時代の末から吉野朝へかけての人。本姓ト部、吉田に住んでそれを姓とした。歌文の名人。御應元年歿。六十九歳

一六 琉球の情趣

東京でも時々歌はれる俗謡に、「琉球におぢやるなら、草鞋を穿いておぢやれ、琉球は石原小石原」といふのがある。此の俗謡で見ると、琉球は如何にも殺風景な所の様に思はれるが、私の想像に描いて居る琉球は、決してそんなものではない。事實は或は俗謡の通りであるかも知れないが、でも私は我が琉球をそんな風に考へたくない。琉球は古代の珊瑚礁から成立

つてみて、今日石原の多いのは、其の珊瑚礁が長いタイムの間に

に碎けたからだ。而もそれが一種

の風致を添へて、風光の明媚なこと、

他に比類がない。いろんな植物が

よく野外に育つて、其の中には比律

賓や馬來邊りから渡來したものも

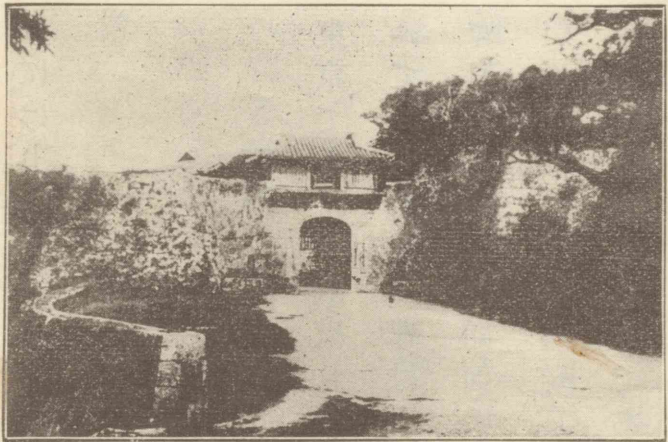
多い。曾て三好理學博士は、自分は

門會 歡 城 里 首熱帶各地方を旅行して來たが、未だ

沖繩のやうな愛らしい熱帶的景色

の現はれて居る島は、是まで見たこ

とがない。と言はれたと云ふことである。



三好理學博

士

名は學。植物
學者。東京帝
國大學理學部
教授

黒潮

臺灣の南端か
ら起り北東流
して、支流は
日本海に入り
本流は本州の
南岸を洗ふ。
藍黑色に見え
る

南歐清明の空を偲ばしめるやうな透通つた麗かな晴々とし

た蒼空の下に、芭蕉葉茂り、榕樹蟠り、梯梧花咲き、阿丹木の赤い

實を結ぶ美しい國である。あたりは海を環らして、經緯度も

熱帶に近く、黒潮は常に其の岸を洗うて、様々の異木に富み、珍

草に飾られて居る。随つて天恵が豊富で、生活に餘裕がある。

餘裕があるから、自然遊藝の道に入り易い。琉球人が一般に

藝術的天才に富んで居るのも、亦彼等の間に、所謂平民藝術の

發達して居るのも、藝人の多いのも、一はそれが爲である。彼

等は常住不斷管絃絲竹の音を絶やしたことがない。口を開

けば忽ち朗々たる絃歌の聲、手を動かせば翻々たる舞袖の匂、

彼等こそは實に生れながらの藝術家ではあるまいか。夕風

蛇皮線
蛇の皮を胴に
張つた樂器。
三味線の如き
もの

赤犬子
琉球の傳說的
詩人で且音樂
者
ナベ
明和頃の人。
琉球國頭郡恩
納の番所の馬
番の妻

一度津々浦々の面を渡れば、いつの間にか夜の帷帳は海島に落ちて、あとは神祕の世界である。燦たる天の星影、月に煌めく濱の眞砂、巨人のやうな雲のたゞずまひ、太古のやうな岩の姿、千尋の底に沈んで行くやうな蛇皮線の音波の囁き、やがて何處からともなく悲調を帯びた船歌が聞えると、夕闇の中から微かに艦聲が響き、沖には淡い夢のやうな漁火が點々として浮んで居る。さすがは詩聖赤犬子を生み、女詩人ナベを出した國だけに、到る處に詩がある。曉風一過、零れる露に夏の夜の夢は早くもやぶれて、海から明けそめる島山のみづくしさは、また言盡せぬ美である。鮮かな南方の日光、濃い草の色、強烈な花の匂、芭蕉葉のそよぎ、深

華胥の國
支那の黄帝が
夢に遊んだと
いふ國。理想
的の國と考へ
られてゐる

碧の海潮の香、一として刺戟の種子でないものはない。刺戟が多いところから、自然想像力も豊富である。椰子のさゝやきを聞きながら、四時緑なす榕樹の蔭に、桃源の夢を結んで居るのが琉球民族ではないか。少なくとも世界に特色ある藝術を生みだした古の琉球人は、正しく然うであつた。彼等の歴史はさながらの神話である。彼等の生活は今も著しく詩趣を帯びて、總べてが原始的である。支那の華胥の國、日本の龍宮は、必ずしも今の琉球を指したものでなくとも、如何にもそれらしい趣のある傳説の島である。夢の國である。この南方の暖かい夢の國は、同時に又詩の世界であり、藝術の郷土であつた。かの國の過去には、幾多の秀逸な文藝、詩歌の花が

咲いた。我が大和民族の曙を偲ばしめるやうな太古の餘韻
 が南國の頽廢的氣分と混じて、今日獨特の藝術を作つて居る
 のも、面白い現象である。

(昇曙夢)

昇曙夢
 名は直隆。露
 西亞文學に通
 じてゐる人

一七 旅ごゝろ

響りんく音りんく
 馬は蹄をふみしめて
 そのかぐろなる鬣は
 その紫の雙の眼は
 えだの緑に袖觸れつ
 馬上に謠ふ一ふしは

打振り打振る鈴高く
 故郷の山を出づる時
 涼しき風のふき亂り
 青雲とほく望むかな
 あやしき鞍に跨りて
 げにや遊子の旅の情

あゝ幼くて國を出で
 偕も繋がぬ舟のごと
 偶ことしかへり來て
 蔭を岡邊に尋ぬれば
 徑を川べに求むれば
 菊は心をおどろかし
 高きに登り草を藉き
 檜原に迷ふ雲落ちて

ひがしの磯べ西の濱
 ゆめ長きこと二十年
 昔懐へばふるさとや
 松柏すでに折れ摧け
 野草は深く荒れにけり
 蘭は思をいたましむ
 惆悵として眺むれば
 涙流れてかぎりなし

去ねくかゝる古里は

再びいふにたらずかし

噫よしさらば今日よりは

日行き風吹き彩雲の

あやに騒ぐ彼方をも

白波たかく八百潮の

湧立ち騒ぐ彼方をも

彼處の岡もこの山も

いづれ心の宿とせば

繁れる谷の野葡萄に

秋の實りはとるが儘

深き林のもみぢ葉に

秋の光は履むがまゝ

響りんく音りんく

打振り打振る鈴高く

馬はかうべを回して

雲にいなゝき勇む時

かへりみすれば古里の

檜原は目にも見えにけるかな 島崎藤村 落梅集

島崎藤村
名は春樹。新
體詩人、小説
家

本誓寺

東京市深川區
仲大工町にあ
る。淨土宗京
都知恩院の末
寺

菊池容齋

名は武保。歴
史畫の大家。
明治十一年歿
九十一歳

平出君

名は鑑次郎、
日本風俗史に
通ず、明治四
十四年歿

今上陛下

明治天皇

一八 愛兒の記念

深川の本誓寺に詣でて、五百羅漢の畫幅を拜觀したる事あり
き。畫は菊池容齋が經營慘憺の筆に成りし大作にて、春秋の
彼岸には、これを掛列ねて供養し、普く有縁の參拜を許す由な
れば、友人平出君を誘ひて歩を運びしなり。容齋が執筆の因
縁については、哀れなる物語あり。今日廣く世に行はるゝ前
賢故實は、此の歴史畫家が畢生の心血を絞りて描き成し、以て
風教を補はんとしたるもの、辱くも今上陛下が「日本畫士」の號
を賜ひしも、これが爲なるべく、孝明天皇が和氣清麿に神號を

追贈あらせられしも、本書が其の動機となりしなるべしとも傳ふ。されど初は此の十年苦心の作も、發行の書肆なく、上梓の資財なく、久しく筐底に籠めて、徒らに紙魚の棲となるを待



福田行誠
芝の増上寺の
住職。明治二
十一年寂、年
八十三歳

菊池容齋

つばかりなりしかば、此の事餘りに情なく、折節は忘年の親友なりし福田行誠に向ひて、堪へがたき遺憾の情を漏したりき。

時に幕末の頃、江戸牛込に加藤金兵衛といふ商人あり。手の中の珠とかしづきし一人の女、年頃にもなりしかば、或方に嫁入らせしに、幾ほどもなくして身まかりぬ。「婚禮の折持參の衣服調度、今はこなたに置きても

詮なし。たゞ歎の種ぞ」とて、婿の方より里方へ返す。里方には受取らず。「一旦遣はしし女の道具は即ちそなたの物。それを返さるゝは、死したるものを離縁するやうにて、草葉の蔭にもいかばかり悲しからん。是はそなたへ。「いやこなたへ」と押問答の果、金兵衛は腕拱きて、さらば吾に思案あり。今深川におはす行誠上人は、浄土宗の大徳、古今の名僧と聞くに、此の聖に託しまゐらせなば、衆生濟度の便ともし給ひて、亡き女が往生の縁ともなりぬべし」といふに、即ち相談は決し、かの調度を賣却し、なほ首尾をあはせて、一千兩の金を行誠にさゝぐ、さてこそ行誠は容齋を招きて、喜ばれよ。御身の志は成りぬ。印刷の料は調へ得たり」とあるに、容齋は涙ぐむまで嬉しく有

難く、脱稿の後凡そ二十年にして、こゝに前賢故實の出版に取りかゝりしなり。「年來の宿望は今しも遂げたるに、いかにして此の大恩にむくゆべき」と尋ぬるに、行誠は「善いかな。さらば五百應眞の圖を畫きて供養し給はば、亡者の爲、施主の爲、いかばかりなる功德ならん。御身の満足より、延いては世間の満足も、ひとへに世を早うせし少女の爲、それを悲む父母の爲なるを」と示す。「それこそ吾にはふさはしき業。いかで加藤氏の名を萬世に朽ちせぬばかり」と、沐浴齋戒して描き上げたが、此の本誓寺の什物なりとかや。

われ等が參詣せし折も、くさくさの供物を捧げたるが中に、小兒の玩具の珍しく面白きを取集めたるがあり。これも近頃

愛兒を失ひし人の、其の遺物をこゝに納めしなりとの事なりしが、一わたりあはれと見たるばかりにて、さして心にも留らず。畫幅の由緒も平たく聞きたるまでにて、容齋の筆法はとあり、思想はかゝりなど思ふまゝの事を言散して、さて、過ぎにき。今思へば淺はかなりしことかな。「昨日は人の身の上、今日は我が身。など、古めかしき言ひぐさながら、今こそひしくと心の底に浸みぬれ。吾も一昨年、夏長女を失ひぬ。長女名は光、時に七歳。笑ひさゝめき遊び戯れしもの、はかなき病に、忽然と此の世を去るべしとは誰か思はん。我が身既に四十に近し。此の後爲すべき事の奥も測り知られたり。唯我が子のみぞ我が誇わが望なりしを、一朝にして死の手に奪

ある時は
ある時はあり
のすさびに
くかりきなく
てぞ人はこひ
しかるべき
(古歌)

ひ去らるゝこと、あらばあらるゝことか。かくても過さば過
さるゝことか。ある時はありのすさびに過してき。なくて
ぞまことのあはれさは知りぬる。よくもあしくも咲出でた
る花の手折らるゝはさてありぬべし。固き荅の人の目にと
まるともなく、不意の嵐にもぎ取られし恨はいかばかり。
年たけて少しにても世にあるかひの務をなしたらば知らず、
やうく物のあやめも覺ゆる程に、早くももとの闇路に歸り
なば、かゝる者のありしと知るは、家の内の人ばかり。世にも
知られて、空しく來りまた往くこと、いかに悲しきことぞ。
豊太閤が朝鮮征伐を思ひ立ちしは、老いての後やうく儲け
たりしみどり兒に死なれて、鬱悶やる方なく、いかにしてか其

愛妃
弘徽殿の女御
隆子

の悲みを忘れんが爲なりと傳ふることのあるを、歴史家は、そ
は英雄の心事を解せず、着々として歩を進めたる經營に、心づ
かざる僻事なり。といはん。されど凡人にもせよ英雄にもせ
よ、人の情は同じきものを。當時の秀吉が胸の内を思ひやり
ては、是非は知らず、傳ふる事のまた所以ありと思はざるを得
ず。「華山天皇は愛妃を先だてし御悲みに堪へ給はざりし其
の機に乗じて、藤原道兼がそゝのかし參らせしかば、乃ち宮中
を遁れ出でて、出家せさせ給ひき。後にぞ道兼が欺けるなり
と知りて、悔しく思し召しける。」と、古史には記したるが、果して
法皇は悔み給ひけんや。かれ佞臣が欺けるなりとは知りつ
ゝも、それも得菩提の善知識、亡き人のためには、よくこそ朕を

誘ひけれ」とのがれ去る道兼を見送りて、満足して御髪は下し給ひけんかし。おほけなき例を引くにはあらねど今我が身に思ひしむにつけて、あらためて昔の跡を顧みるなり。健かなる者は日々の務に勵みて、其の悲みを忘るべし。悟ある者はせん方なき世の習と、術なき思にしづまざるべし。あはれ身も心も弱き者の奮ひ立ちて忘るゝことも得せず、さりとして一筋に思ひあきらむることもならず、つくゞと日毎に同じ歎をくりかへすかな。

(藤岡作太郎「國文學史講話」)

一九 悴の世話みなりし禮状
幸便し候や一筆にこそまゐるせん時をうら

藤岡作太郎
國文學者。文學博士。東京帝國大學教授
明治四十三年
歿、四十一歳
悴
頼山陽をさす

解程冷氣お移りもあはれせん。その所地
どかゞ換りし所候もおぼゞし。此機婦々
をせらね事。此をたぐね。まゝやせん
を文々し。此のいふや。げぞ。此等。此は。り
おあ。ま。い。あ。せん。事。一。存。心。乃
うらふ。此。候。上。ご。い。づ。ら。さ。を。を。か。い。は。せ
と。は。ら。く。し。る。の。お。は。ら。せ。な。事。を。い。は。れ
を。い。く。は。し。は。文。を。い。ふ。は。ら。せ。ら。ぬ。は。ら。せ。事
此。出。程。の。は。事。一。と。あ。上。げ。い。は。れ。と。換。り
あ。い。く。は。ら。せ。ま。い。と。は。ら。せ。は。ら。せ。の。は。事

久太郎
山陽の通稱

夜なぞとぞしく 何ぞ、様は山解成さるへ
ととゆ いろいろもあつてはふりたるはより
先月廿三日の書さし紙一紙は其の
あがき後へ附り出で返る所 なるより
お交さるは御意さなるし ちされ誠
は少より様よりは左をなくは御切あは志
うさねあり、越えまゐらるは私におつて
ましく赤なき存じもあつては誠に入
すねは氣儘名の病方者ふはなはうそ
あぞくは固りおぼさるはらんし ちぞ

長左衛門
篠崎小竹

山行 いろいろされは御事と云はれ存
じまゐるはまゝにその使のまゝは御
うしおたづねのまゝは御事と云はれまゝ
赤なき福ひ納めまゐるはまゝは御
はまゝは御事と云はれまゝは御事と云
は御事と云はれまゝは御事と云はれ
へん長左衛門様よりおぼさるは御
し 御事と云はれまゝは御事と云は
者の上と云はれまゝは御事と云はれ
中上と云はれまゝは御事と云はれ

賴梅颯
名は静子
山陽の母

出で給まづい何かの山に身を并らうとぞ
ほろくちしげまゐるせんめでたがり

紫月言

賴梅颯

以條崎山皇孫

二〇 和歌の感興

古今集の歌は、詞すなほに餘情ありて、おほくは一唱三歎するにたへたり。

古今集
醍醐天皇の勅により紀貫之等が撰したも、ちどり
讀人知らず

も、千鳥さへづる春はものごと
あらたまれどもわれぞふりゆく

世の中に
在原業平

此の歌を吟ずれば、老人懷舊の情を感じずべし。

世の中にさらぬわかれのなくもがな

千世もといのるひとの子のため

此の歌を吟ずれば、孝子愛親の情を感じずべし。

風吹けばおきつ白波たつた山

夜半にやきみがひとり越ゆらん

此の歌を吟ずれば、貞婦思夫の情を感じずべし。

忘れては夢かとぞ思ふおもひきや

ゆきふみわけてきみを見んとは

此の歌を吟ずれば、君子不忘故舊の情を感じずべし。此の類、外

にもなほ多かるべし。古今集以後、八代集に至りては、あげて

風吹けば
讀人しらず

忘れては
在原業平

八代集

古今・後撰・拾遺・後拾遺・金葉・詞花・千載・新古今の八代勅撰集をいふ

武士の
金槐和歌集

數ふべからず。中に翁が常に好んで吟ずる歌一首あり、鎌倉三代實朝の歌に、

武士の矢なみつくろふ籠手の上に

あられたばしる奈須のしの原

此の歌を定家卿評して、鬼をとりひしぐ體といはれしとぞ。

誠に勇壯をもてすぐれたる歌なり。外に此の體の歌多くは見えず。

定家
俊成の子。鎌倉時代の有名な歌人。新古今、新勅撰集の撰者

さて、春秋のあはれをいひ、月花などを詠めし歌も、たゞ其のままに寫しとりて、さながらみるやうにあるは、なにのをかしきふしもなけれど、かの詞つゞきたくみに、よくいひかなへたりと見ゆるよりは、感ふかうしてすてがたく覺ゆ。

久方の
古今集組友則

久かたの光のどけき春の日に

しづこゝろなく花のちるらむ

庭の面はまだかわかぬに夕立の

そらさりげなくすめる月かな

夕されば門田の稻葉おとづれて

あしのまろやに秋かぜぞ吹く

秋風にたなびく雲のたえまより

もれいづる月の影のさやけさ

津の國の難波の春はゆめなれや

あしのかれ葉に風わたるなり

是等の歌、不盡の景氣をうつして、さながら目に見るがごとく

庭の面は
新古今集、源頼政

夕されば
金葉集、大納言源經頼

秋風に
新古今集、左京大夫頼輔

津の國の
新古今集、西行法師

覺ゆ。折にふれて之を吟詠せば、襟懷を清くし、塵想も消ぬべし。西行が、わが佛法は倭歌によりてすゝむ。といひし、さもありなんかし。わがともがらも、吟詠をたすけ性情を養ふには、たよりなきにあらず。

されば倭歌のすてがたきはこゝにあるべし。但し此の頃の歌はあたらしくいひいでて、一ふしをかしくきこゆるはあれど、ことばの外にけしきおぼえて、あはれふかきはなし。いかでか人の心を作興する益あるべき。 駿臺雜話

二一 顯家卿の北の方

先帝の御時、源中納言陸奥みちのくの軍を上あまたしたがへ給ひ、道

先帝
後醍醐天皇
源中納言
北畠顯家

御父
北畠親房

道を平げて、美濃の國までおはしけるよし、さきだちて聞えければ、うへ石子橋よりはじめて、たのもしきことにおぼし給ひけるに、「阿倍野の露と消えさせ給ひけり」と、刑部丞友成が、そのきは最後の有様を、参りて泣くくかたるに、燈火の消えぬるやうになん人々の心はなりにける。御父の卿はいかばかりおぼすにか、さきだちし心もよしや中々に

うき世の事を思ひわすれて

北の御方はたゞ伏ししづませ給ひて、さらに御心地もなかりけるを、さわぎておもてに水などそゝぎしほどに、またの日の夕暮のほどに、すこし御心地の出でカッカレテさせたまひて、玉リナモの緒のたえもはてなでくり返し

觀心寺
河内國南河内
郡に在る

おなじ浮世にむすぼほるらん
なほおなじ道にとおぼしたち給へる御けしきのいちじるく
侍りければ立去り給はで、人々のまもりければ、御心にもまか
せ給はで觀心寺といふ山寺にて、御ぐしおろして住ませ給へ
るに、

そむきても猶わすられぬ面影は

うき世の外のものにやあるらん

こゝに三年が程過し給ひて、世の騒もしばししづまりければ、
さすが故郷の方や思ひ出でさせ給ひけん、吉野山をたどりい
でさせ給ふとて、

いづくにか心とゞめん三吉野の

吉野の山をいでてゆく身は

親房卿の御許にしばくおはしまして、曉方に立出でさせ給
ひけるに、御名残の盡きさせ給ふまじき御事にてありければ、
顧みさせ給へるに、有明の月いとさやかに山のは近く見えけ
れば、

別るれどあひも思はぬ三吉野の

峯にさやけきありあけの月

阿倍野を過ぎさせ給ひけるに、こゝなんその人の消えさせ給
へる處とつげければ、草の上に倒れ伏させ給ひて、

なき人の形見の野べの草まくら
夢もむかしの袖のしらつゆ

このほとりに、刑部丞友成が世をそむきてありけるを尋ねさせ給ひけるに、いそぎ参りて御有様を見奉るに、さしもゆかしくわたらせたまひける御よそほひの、いつしかかはりおとろへさせたまひけるにやと、涙とゞめあへで、住吉天王寺のほとりまで御おくり参りて、處々あないしけるに、天王寺の龜井の水のほとりの松の木をけづらして、

後の世の契のため^{アハ}にのこしけり

むすぶ龜井の水ぐき^カのあと

と書きつけ給へり。それより友成入道は歸りにけり。一とせ尋ね來りてかたりけるに、いとあはれにおもひ奉りて、その後天王寺へ参りけるに、御筆の跡の消えもはてずして残りけるを見参らせて、そゞろに袖をしぼりにけり。その後舊都に上らせ給ひて、母君もともに世をそむきおはしけるが、さきだち給ひて、又のとしの春うせさせ給ひけり。とぞきこえし。日野中納言資朝卿の御女なりき。

(吉野拾遺)

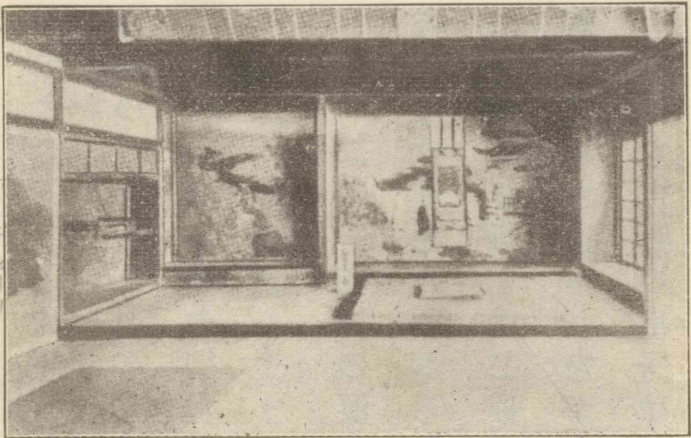
吉野拾遺
隠し松翁の著
吉野朝時代の
逸話を記した
もの

一一一 御袖の涙

吉水院は、延元のむかし、後醍醐天皇のわたらせ給ひしところにて、楠木正行をはじめ、忠義の人々の守護し奉りし所なり。假の宮居とは申しながら、いと狭隘なる處にて、みそなはす皇^{ミソナハス}后宮にも、吉野の皇居はかゝる所なりけるよと、思し召す御心のほど推量り奉るもかしこし。御遺物などこまやかに御覽

皇后宮
後の昭憲皇太

延元四年
(一九九九)



ぜられ、殊に昔をしのばせたまひ、御涙にむせばせ給ふ。御供
 の人々もうちしをれて、袖をぞぬ
 らしける。後醍醐天皇は、延元四
 年八月九日より御惱ありて、次第
 に重らせ給ひ、朕、國賊をほろぼし、
 天下を平げざるを恨む」と仰せた
 まひ、また「のちの南朝の帝をはじ
 め、仕へまつる忠臣、義士、朕が志を
 體し、力をつくして朝敵を打ちほ
 ろぼせ。もし命に背き、義を輕ん
 ぜば、君も繼體の君にあらず、臣も忠烈の臣にあらず」と仰せご

吉水院御座所

敬三

此の文の作者
香川敬三。當
時皇后宮大夫
であつた

と遣したまひ、終に同月十六日の夜、劍を按じて崩じたまひぬ。
 御葬送の御事など、かねて、御遺勅ありしかば、御終焉の御かた
 ちを改めず、棺槨を厚くし、吉野山の麓なる塔の尾の山陵に葬
 り奉りきとぞ。心なき者だにも、此の事を聞きたらんには、切
 齒扼腕にたへざるべし。かしこくも皇后宮の御涙にくれさ
 せ給ふ御こゝろの中、おしはかり奉りて、敬三もなみだせきあ
 へず。

この院の内に、後醍醐天皇の御像を安置して、吉水神社と稱し
 奉るよし、宮司の奏するにまかせ拜みたまふ。それより塔の
 尾なる後醍醐天皇の山陵に詣でさせ給ふ。此の御道筋は殊
 にけはしくして、御供の人々も困じはてたるが、御厭もなく登

らせ給ひ、山陵の御前におはしつきて、いとねんごろに拜ませ給ふ御有様、見あげ奉る人々もなみだせきあへず。敬三、

そのかみに我もありせば大君の

ツマミ又者テモ 此の御楯とならましものを

それより如意輪寺に成らせ給ひ、楠木正成、正行、正儀、菊池武光、兒島高德などの畫像をも御覽ぜらる。また正行の死を決し、如意輪堂の扉に「かへらじとかねておもへば梓弓なきかずにいる名をぞとどむる」と矢じりもて記したるをも御覽ぜられ、如意輪堂に入らせらる。此の堂は昔焼けうせて今のは假に建てたる由なり。正行主従死を決し、先帝の山陵にまうで、この堂にて一族主従百四十三人の姓名を過去帳にかきつらね



塔の尾の墓

かの歌をしるしけん其のむかしをしのばせ給ひてや、堂の内をしばし御覽ぜらる。日もはや西におちて空も何となく雨をもよほしければ、御宿にかへらせ給はんことを乞ひ奉り、又前にのぼらせ給ひしつゝらをりの險しき山路を下らせ給ひ、吉野町の竹林院なる御宿にならせ給ひてのたまふやう、すぎし日より雨ふりつづき、道のあしきに、今日も亦朝よ

りふりぬべき空のけしき、山陵へまうでさせ給はんはかたく

や』と、大夫の申しつる、いかゞとおもほしながらも、しひて出で
にしかひありて、山陵を拜みつるぞいと嬉しき』と。又此の度
吉野にもものしたまふこと、花のためならでも、はら此の山陵に
詣で給はんと、の御心におはしまししよし仰せらる。いとあ
りがたきことにこそと畏みぬ。

吉野にて遊ばされたる御歌の中に、

塔の尾の御陵に詣で給はんとする道にて

吉野山みさゝぎ近くなりぬらん

散りくる花もうちしめりたる

竹林院にて

村雨は晴れたる今日もふりし世の

御居たづねて袖ぬらしけり 香川敬三 繫暉日記

二三 一茶小品

一 雞の蹴合

東海寺に詣でけるに、鶏どもの跡を慕ひぬることの不便さに、
門前の家に寄りて、米一合ばかり買ひて、董たんほほのほとり
に散しけるを、やがて、仲間喧嘩を幾所にも始めたり。其の内
木々より鳩雀はらくと飛來りて、心靜に食ひつゝ、鶏の來る
時、小早く元の梢へ逃去りぬ。鳩雀は蹴合ひの長かれかしと
や思ふらん、士農工商其の外様々のなりはひ、皆かくのごとし。
米蒔も罪ぞよ、鶏が蹴ふぞよ

一茶
小林彌太郎。
信州の人。俳
人。文政十年
歿、六十五歳
東海寺
東京府下北品
川にある寺

二 老懷

十六日晝頃、煙管の中塞りてければ、麥わらのやうに、竹を削りて、さし入れたるに、中にしぶりて、ふつにぬけず。竹の先僅か爪のかゝるほどなれば、すべきやうもなく、缺残りたる齒にて、しかとくはへて引きたりけるに、竹はぬけずして、齒はめりめりとおくだけぬ。あはれ、あが佛と頼みたる、只一本の齒なりけり。さうなきあやまち、老いたりけり。釘ぬくものにてせば、するくくとぬけぬべきものを、

齒はぬけてあなた頼むもあもあみだ

あもあみだ佛あもあみだ佛かな

なつかしや籠かみやぶるきりくす

三船才何
毛去来ル人
也魚人思リ又
災難

かりくと竹かぢりけりきりくす

三 丸儲け

去る十六日、中風に吹倒され、直ちに北邨（北邨）の泥となるべかりしを、此の正月一日初鶏に起きて、東山の旭のみがきなせる玉の春迎へんとは、我ながら珍しく、さながら生れかはりて、再び此の世に出でし時もかくこそあらめと覺え侍る。

今年からまるまうけぞよけさの春

文政四年元旦

蘇生坊 一茶

（一茶選集）

布施太子
葉波國王の子
須太孳。本生
譚に釋迦の前
身として記し
てある

二四

臺詞

布施太子の出城 其一

二四

布施太子の出城 其一

一一一

王妃
葉波國皇后

(王妃の馬車登場。供奉の列なく、只一人の女官身代陪乗せるのみ。馬車止る。王妃馬車より下りて太子の馬車に走せよる。太子急ぎ馬車より下る。)

王妃 お、須シメ太タ拏ヌや。(太子を抱いて)わたしの愛兒、わたしの寶。お前は行つてはならない。行つてはならない。

太子 (やさしく王妃を抱いて) 母上よ。お心をお靜かに。

王妃 そなたに行かれて、わたしは、どうして生きて行かう。

わたしの望はなくなつてしまふ。わたしの命は滅びてしまふ。わたしは――

太子 (しづかに) 昨夜くれぐれも申上げてお暇乞を致しましたやうに――

王妃 あゝ、昨夜、夜どほしわたしは考へあかしたのだよ。そ

なたと離れても、これから生きて行かれるかどうか、ためし
て見たのだよ。わたしはお前がもう私から去つたものと
思ひ定め、神々にわたしの心を支へて下さるやうにお祈り
して、できるだけ耐へようと努めてみたのだよ。けれどわ
たしは、昨夜そなたのないわたしの生活が、どんなものであ
るかといふことを知つた。とてもわたしには耐へられる
とは思へない。お前はどうかあつても去つてくれてはなら
ない。

太子 (肅然として) 母上よ、わたしは行かねばなりません。

王妃 いゝえ、そなたは行つてはなりません。わたしが泣崩
れて死んでしまふ事をそなたが望んでくれるのでなかつ

葉波國
太子須太孛經
及び本生譚に
見える國名

たら。須太孛や。どうか思ひ出しておくれ。わたしがど
んなにしてそなたを育て、來たかを。そなたが小さい時
わたしはそなたを、わたしの瓔珞を飾つてあるどの珠より
も美しい、どの珠よりも稀な珠のやうに愛しました。實際
に、そなたにそれだけの價があつたのだ。そしてそなたが
長じてからはそなたはわたしの誇であつた。私の師であ
つた。わたしは葉波國の全領土よりも、そなたを尊んでお
る。そなたのやうな氣高い人の母であることの名譽を、王
妃の位よりも重んじてゐる。思へばそなたは、わたしの胎
内に宿るには、あまりに尊かつたのだ。抑もわたしが、どの
やうにしてそなたをわたしのものとすることができたの

王様
須太孛の父

帝釋天様
印度民族の崇
拜する神

だとおもふ。そなたの場合では、わたしは特別わたしのも
のといふ感じを持つてゐる事が許されねばならないと思
ふ。何故と云つて、わたしはそなたを神に祈り求めて授け
られたのだから。王様とわたしとは、世嗣のないのを嘆き
悲しんだ。その他すべての充ち足つた幸福も、その嘆の前
に輝を失ふかと思はれる程だつた。王様は、尊敬すべき祖
先から傳へられ、多くの記念すべき名譽ある戦争によつて
外敵から完全に護られた此の美しい豊饒な國を嗣ぐ者の
ないことを思ふごとに嘆息遊ばした。そして遂に王様と
わたしとは相談して、帝釋天様に子供をお授け下さるやう
に祈願を立てることになつたのだよ。わたしたちはどん

なに嚴かな儀式と、淨い齋戒と、永い斷食とを以て熱心に祈つたことだらう。そして終にわたしたちの切なる祈が聽かれて、わたしは身重になり、臙てそなたが生れた時に、わたしたちの喜はどんなだつたらう。その時ほど王様のお顔が幸福に輝いたのを見たことは、どの凱旋イリヤニカニツテカ、ツタの時にもなかつた。金甕カネツツの水で玉のやうな肌を洗ひ、練りのいゝ絹布で包んで、しみとくとそなたの顔を見た時に、わたしは涙がこぼれて止まらなかつた。その瞬間から、そなたはわたしの命になつてしまつたのだ。そなたはまた、あの立太子式の日タテウヂノシキのことを思ひ出しておくれ。そなたが元服するのを待ちかねて、あの盛な、目もまぶしいやうな華麗な儀式で、王様が

手づから、そなたの頭に冠を載せられたとき、宮殿も搖ぐやうな萬歳の聲の裡に、そなたが百官と庶民の前に、太子として初めての挨拶をした時、そなたはどんなに立派で、王者の威嚴を備へて美しく氣高く見えたことだつたらう。その時わたしは母の幸福に酔ふやうな氣がした。須太拏や、考へてみておくれ。その幸福が皆空しくなつてしまふのだ。幸福が大きかつただけに、それを失つた後の苦みは一層ひどいだらう。どうぞ、あはれな母を、その恐しい淋しさのうちに残さないでおくれ。

太子、母上よ、あなたのお心はよくよく解ります。あなたはどんなにわたしを愛して下さつたでせう。色々思ふと、わ

たしの胸は清い清い涙で一杯です。あなたは此の法界に愛といふもののあることをわたしに知らせて下さつた最初の方でした。わたしがそれを至上の眞理と認め、その眞理にわたしの一生を捧げて奉仕しようと思つてゐる、その愛といふものは、實はあなたから初めてその觀念の種子を賜はつたのであります。あなたはわたしにありあまる程の母らしきめぐみをかけて下さいましたが、その種子こそ、あなたのわたしに賜はつた一番尊い賜物でございました。わたしはあなたから賜はつた生のまゝの愛の粗鑛から、純粹の黄金を鍊出しました。あゝ母上よ。わたくしが今、あなたとお別れせねばならぬと決心するのも、實にその

愛のためです。その愛の至上命令に従ふのです。あなたと今お別れするのが、却つて本當にあなたを愛する道であると思はれるからです。永久にあなたとお別れしたくないからこそ、今お別れせねばならないのです。昨日くれぐれも申上げた通りです。不滅の都で、再びお目にかゝり、そして其處なる宮居に、永久に共に棲みませう。何卒わたくしをいさぎよく送つて下さい。

二五 布施太子の出城 その二

王妃 須太孛や、わたしはそなたの心が解らないのではありません。そなたがどんなに母思ひであつたか、わたしの思

ひ出が一杯です。それがわからないでどうしませう。それだからこそ、そなたと別れることが耐へられないのだよ。わたし、どうあつてもそなたを遠くの山に遣つてしまふことは出来ません。年とつた母親の愛といふものが、どんなに切ないものだか、どうか察しておくれ。そなたに云ふが、わたしは此の二三年めつきりと體が衰へてきてゐますよ。老の淋しさがもうわたしをとりまくやうになつて來ました。見ておくれ。わたしの此の鬢の霜を。

太子　わたくしの心を弱くしないで下さい。

王妃　わたしの白髪頭が冠の重さにも耐へられなくなるのはもうぢきです。そなたと別れてしまつたら、わたしはき

つと床につきますよ。

太子　あゝ。

王妃　わたしが死ぬ時、そなたはわたしの臨終の枕べに侍しては下さらないのですか。わたしの最後の息が呼ぶのは、きつとそなたの名にちがひない。その時そなたは、わたしを抱いては下さらないのですか。母親がその獨兒を育てるときに、自分の末期の唇を潤ほして貰ふことを願はないものがあつたらうか。

太子　母上。

王妃　そなたは、わたしのとむらひの列にも、つらなつて下さらないのですか。

太子 お聞き下さい、母上。あなたの母としての熱愛が今のわたくしを躓かすならば、あなたにとつて恐しい禍ですぞ。母なるものゝ名の上に、永久に天の呪を呼ぶのですぞ。母性の愛の中に巧みにつくられた悪魔の陷阱が、今はつきりとわたくしに見えます。よくお聞き下さい。わたくしは母上から愛の觀念の種子を賜りましたが、私はそれを地に蒔いた時に、不思議にも其處には藥草と毒草とが同時に生えました。私とその二つを見分けることが出来るやうになつたのは、ほんの最近のことなのです。これは實に恐しいことでした。一つは人類を平和に導き、一つは争鬪に誘ふのです。一つは涅槃に、一つは輪廻に、其處に深い陷阱

がかくされてゐるのです。種族の愛は、それが法の光で照らされないならば、眞の愛と異なるばかりでなく、相乖くのです。母子も一たび隣人でなくてはなりません。隣人の愛のみ眞の愛です。世嗣に豊かな領土を遺したい欲望が、父上を多くの戦ひに驅りました。我が子の聲色に觸れてゐたい執着が、今世にも尊い大願の旅程からわたくしを阻まうとしてゐるのです。今私が退轉して此の城に留まれば、母上もわたくしも、共に滅びるのです。葉波國の國民も滅びるのです。どうぞわたくしを行かせて下さい。勇ましく送つて下さい。

王妃 (すゝり泣きながら) あゝ、わたしはどうしても遣らね

ばならぬのか。いゝえ。わたしはやることは出来ません。別れることは出来ません。

太子 (跪きて母の手を取り) 尊き母上よ、勇氣を奮ひ起して下さい。あなたの生れながらの美しい知慧と、敬虔な心を呼醒まして下さい。たとへ今お別れ致しましても、やがて天上で、限ない命を持つて――

王妃 わたしは眩ゆい天上よりも、此の葉波國の黒い土がなつかしい。たとへ短い命でも、そなたの黄金色の髪を見わたしの胎内から出たその鶯色の肌に觸れてみたい。あゝ、わたしは今の苦みを見るよりは、母とならなかつた方がよかつたと思ひます。(地に伏して泣崩れる)

太子 (無言のまゝ王妃の瓔珞の搖ぐのをぢつと見つめて居る)

二六 布施太子の出城その三

檀特山
北印度ガンダ
ラ國にある山

(間。群衆の喧噪の聲舞臺のうしろに起り次第に近づく。「太子殿下。」檀特山へ――)の叫聲時々聞ゆ

太子 (突然立上る) ではお別れいたします。(馬車の方へ行かんとす)

王妃 (起き上り、怨めしさうに) あゝ、そなたはどうあつても行くのですか。(咽び泣きながら)お行き。死んでしまふから。わたしは生きてはゐられないから。

太子 (思はず二三歩母の方に寄らんとし、踏止まり、顔色蒼ざめ、一瞬間沈黙の後決然として) お死になさい、母上。

王妃 (眞青になつて) え。

太子 (天を拜しながら) 悪魔よ退け。今自分の決心を鈍らさうとするものは禍だ。永劫に呪はれるであらう。たとへ肉身の母であつても外道だ。悪魔だ。我が前に立つ女人よ。汝と我と何の關はりがあるう。

王妃 須太孥。

太子 今の自分の發心を妨げて、永久の冥罰を蒙るよりも、惠深き天よ、願はくば速かにわが母に死を給へ。

王妃 お。

太子 女人よ。わしは今そなたの子としてそなたの前に立つてゐるのではないぞ。今わしは衆生のものだ。今わしはわしを生んだ女につくものでなく、天につくものだ。あゝ今わしの道を阻むよりも、死は寧ろそなたにとつて幸だ。今わしをそなたの懷から人類の手に返せ。そなたが帝釋天からあづかつてゐたわしをも一度帝釋天に返せ。

王妃 (天に向つて兩手を絞りながら) 南無帝釋天。

太子 天王帝釋よ。此の女人を守らせ給へ。

王妃 (地にひざまづく)

(間。群集の喧噪益々はげしく近づき來る)

王妃 (突然、涙に洗はれたる顔を上げて) 行け、須太孥よ。行つ

て無上の悟を開け。道を成じて父と母と葉波國の先祖代代の靈と、すべての民を救つておくれ。

太子 おゝ母上。(走せよつて王妃の腕に身を投げかく)

王妃 おゝわたしの愛兒。(一度抱きしめ、やがて靜に太子を放し、跪きて太子を拜し)わが師よ。

太子 (瞑目して佇立す)

王妃 そなたは私の善知識です。わたしの救主です。もつたいない。もつたいない。そなたを生んだわたしの身體は、何といふ祝福されたものであつたらう。わたしに何の價があつて數多い女の中から選ばれたのだらう。いつくしみ深き天よ。いと小さきはした女が、今さゝげまする心

からの感謝をお受け下さいまし。

太子 (涙ぐみ) あなたのお言葉はあまりに勿體なう御座います。若しわたくしに何か尊いものがありますならば、母上よ、それは實にあなたに、かくも高貴なあなたに負うてゐるのでございます。

王妃 そなたをわたしの私有と思つたのは、わたしのあやまりであつた。わたしの思ひあがりであつた。わたしは今はずきりとそれが解りました。天よ、わたしの僭越をお赦して下さい。そなたは本當に人類のものです。天のものです。わたしは今そなたを、わたしの手から放します。天に返します。お行き。須太孥、そなたの使命のために。そな

たを産んで人類に贈つたわたしの勳は永久に人類の記憶から減びることはないであらう。わたしの名譽は眩ゆい程です。

太子 尊き母上よ。諸天もあなたを嘉し給ふでございませう。
(倉田百三―布施太子の入山)

倉田百三
小説家戯曲家

大正女子國文讀本 修正版卷七終

大正十二年一月廿二日	大正十一年九月十八日	大正十一年九月廿五日	大正十一年九月廿八日	大正十一年九月廿九日	大正十一年九月三十日
修正再版發行	修正再版發行	修正再版發行	訂正再版發行	訂正再版發行	發行

大正十二年度 臨時定價	金 五 拾 四 錢
卷七、定價	金 參 拾 貳 錢
大正女子國文讀本修正版	全拾册

著 作 者 保 科 孝 一

發 行 者 東 京 市 牛 込 區 白 銀 町 廿 九 番 地 合 資 會 社 育 英 書 院

印 刷 者 東 京 市 京 橋 區 西 紺 屋 町 二 十 七 番 地 佐 久 間 衡 治



發行所 東京市牛込區白銀町廿九番地 合資會社 育英書院

發賣所 東京市京橋區南傳馬町二丁目 振替口座(東京)二八〇九番 目 黑 書 店

所 刷 印 合 英 秀 社 會 式 株



